

---

# 虚虚

目瞭然

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚虚

### 【Zコード】

Z7947U

### 【作者名】

目瞭然

### 【あらすじ】

西下上東高等学校では女子の登校拒否が多発していた。

元凶は一人の男子生徒『星木藍』。

生徒会長の『良真義凜』が彼との接触を決心した日、時期はすぐれの転校生が。

八月二十三日に消えます（作者が）

プロローグ

私の名前は海耳未美。つみみみみ 西下上東高校に通う2年生。今日は、ひょんなことから付き合い始めた彼氏との初デートの日。ちなみに遊園地デート。

時刻は11時45分。彼は10分前行動が基本なので、今田はちよつとびっくりさせるんだ！ ムツフツフツ。これで彼もイチコロだぜい！

：彼は来なかつた。

/ / / / / / / /

16時30分。遊園地から離れていく未美。俯いているので、泣いているのかもしれない。それをビルの屋上から眺める1人の少年。彼は我慢の限界だった。

「ふつ　ふつ　ふぶ　あはははははハハハ！」

とうとう堪えきれず笑いだす。

「あははっ！ 最っ高！ あーあ、また泣かせちゃったぜ。あはは  
ハハー！」

いつまでも笑い続ける少年。名前は『星木藍』ほしきあい、西下上東高校の2

先生である。

## 転校生

私の通う西下上東高等学校では、女子生徒の登校拒否、不登校が問題になっていた。

元凶は一人の男子。元々、レベルが高い割に緩い高校だったので、制服を着崩したり、髪を染めたりする生徒がいたが、先生もそれを注意せず、生徒会長の私はまさしく孤軍奮闘するはめになり、ストレスで来年辺りハゲるんじゃないかと毎年思っていたが今のところ平気で、肩までのストレーントは健在、ついでに私の外見をもう少し追記するなら、まず先に眼鏡をかけてないことをはつきりさせておきたい。

…あれ？ 話が盛大に逸れてしまった。

つまり、自由な校則故、チャラい生徒が多く、そんな中、2年の星木藍という男子がこの度の女子不登校事件の元凶なのである。

被害にあったのは全部で7人。全員が不登校になる直前に彼と付き合つていて、すぐにフラれていた。が、彼女達から言質を取ることは出来なかつたため、先生も手出し出来ないでいる。

同じ理由で私も何も出来ないでいたが、とうとう被害者が7人になってしまったので、彼に接触することを決心した。

そんな私の決心を知つてか知らずか、その日彼女は転校してきた。

9月23日。午前8時30分。朝のHRの時間。2年A組は静まり返っていた。

「人為七ひとなりななです。よろしく」

まるでお人形さんみたいな色白の女の子。加えて金色で緩くウェーブのかかったロングヘア。そのため、ハーフにも見えてしまう。女子である私まで見とれてしまふほどの美少女だった。ついでに黒板に書いた字も綺麗だった。

「…というわけだ。季節外れだが、みんな仲良くするよ！」。それで席なんだが…」

彼女の自己紹介を補足し終えた先生だったが、次の『どこ』の席に座らせるか』という段階になつて急に口をつぐんだ。

先生が困るのも無理はない。2Aには空いてる机が2つある。が、1つは教卓の正面で、もう1つは一番後ろの左端なのだ。

真面目な生徒は同時にほとんどが恥ずかしがり屋のため、多くは2列目以降に座り教卓前が空いてしまつている。そして後ろは主に落ちこぼれ生徒が集まっている。

さすがの先生も教卓前の席に転校生を座らせるのは気兼ねしてしまつようで、かといって落ちこぼれのテリトリー、それも左端は馬鹿男子の密集区域なので余計に薦めづらかった。

結局、「あの、私は前でもいいです」という人為さんの発言で彼女の席は決まったのだった。

私の隣に。

「私は良真義凜。<sup>よしまあきりん</sup> よろしくね、人為さん」

「七でいいよ。」

## 泣いている少女

「す」「いね、七さん！」

「そんなことないってば」

朝のHR延長の影響を受けた一時限目。しかし、七さんの予想外の秀才ぶりに授業はスムーズに進み、滞りなく終わつたのだった。

そして今は昼休み。

「人為さんって前どんな学校に通つてたの？」 「お家はどこ？」

「彼氏は彼氏は？」 「その髪つて染めてるの？」

定番の質問攻めをどうにかくぐり抜けた私達は、七さんに校舎を案内していた。

「いやいや、一時限目のアレは大学入試レベルだったよ

「凜さんだつて一時限目は名解説連発だつたじゃない」

「いやー、得意科目だったから。それくらいは全国レベルにしないと」

「まあ、もう九月だしね。そろそろ大学入試を考え始めなきゃ

「はい、そこまで！」

と言つて、私と七さんの会話に割つて入つたのは城峰唯<sup>じゆみねゆい</sup>。私の幼なじみ。頭はさほど良くないが、聞き上手で話し上手、話が合わない

くても馬は合う、そんな女の子。故に友達は妙に多い。ちなみに彼女はバスケ部で背が高く、ボーカルシユな喋り方が特徴で、髪はつねにポニー テールだ。

ただ、今重要なのは唯の外見ではなく頭がそれほどよろしくないということで、つまり今の話題には着いていけず、ほとんど口を開くことはなかつたのである。

「唯、いたんだ」

「最初つからいたつづーの！」

なんてお喋りしながら、私達三人は屋上への階段を上つてゐる。七さんから、屋上が見たい、という要望があつたので、今日は屋上でお昼なのだ。

屋上。眺めが良いわけでもないため、昼食場所としての人気はそこそこ。平均は五、六人で、一人もいないこともざらにある。

が、今日は先客がいた。

私達が開ける前に、ドアは勝手に開いた。そして、茶髪の女の子が出て來た。

茶髪で小さめの可愛い女子。見覚えがないので、おそらく一年生か三年生（見た目一年生）。彼女は私達と鉢合せして驚いているようだ。視線が合つ。が、すぐに顔を俯き氣味に逸らし、走り去つた。

茶髪は校則違反とか、廊下は走るなとか、注意する氣は起きなかつた。

彼女は泣いていた。

私達が彼女の走り去つていった階段を見ていると、背後、つまり屋上から声がした。

「やあ、良真義凜さんに城峰唯さん、そして人為七さんじゃないですか」

振り返ると、そこには星木藍がいた。

## 星木藍

「美人が三人揃つてお昼ですか？ ゼひ『一緒に緒したいですね』言いながら彼はこちらに歩み寄つて来る。

軽薄な口調に軽薄な態度。この男が、星木藍。無駄な装飾は特に無し。Yシャツも一応ズボンにしまつている。下げパンだが、ベルトも普通で校則には引っ掛けからない。これだけならわりと問題ない。が、彼の髪は金色だ。

校則違反。いくら似合つていようが、イケメンだろうが、駄目だ。生理的に受け付けない。七さんみたいに元々ならともかく（あれ？ 確証は取つてないや）、染髪とか有り得ない。こっち来るな。

「……誰？ 何で私の名前知ってるの？」

七さんが言つた。が、コレは別に問題じやない。七さんほどの美少女転校生なら、もう誰が知つてもおかしくない。奴なら尚更だ。

「それは別に謎じやないよ、人為さん。君みたいな美少女転校生ならすぐに噂になるからね。特に俺みたいな奴のアンテナにはすぐにつっ掛かるよ。あつ、俺は星木藍ね」

そら見たことか。

「じゃあ、何で私達の名前まで知つてんだよ？」

これは唯の言葉。ただまあ、私は新生徒会長としてスピーチを行つたばかりだし、唯は交友関係が広いし、それ以前に同学年なので、これも問題じやないと思つ。

「いやいや、良真義さんも城峰さんも有名人じやないか。それに俺達同級生だる」

やはりこちらも、予想通り

「ていうか、俺は学校中の可愛い子は覚えてるからね。君達ほどのレベルなら知つてて当たり前だよ」

……予想以上だつた。もう完全に受け付けられない。寄らないで下さい。

とは言え、私だって空氣は読める。流れからすると、次に発言するのは私だろう。仕方なく、私は現状で一番問題であることを尋ねる。

「……さつきの子は何なの、星木藍さん？」

「あれ？ 僕のこと知つてんだ」

「知つてますよ。なんせあなたは学年一位ですからね」

「まあ、だるうと思つてたよ、学年一位さん」

そう、実は現一年生の一位は奴で一位が私なのだ。七さんは驚いたようだ、目を丸くしている。まあ、こんな場面珍しいしね。ちなみに、唯は百八十位。

「それで、あの子は何？」

私達と彼の間にはもう五メートルもない。私と唯はさりげなく、

七さんを庇つよう前に前へ出る。

「うーん、……今は他人かな」

「ちつきまでは?」

「…………彼女?」

場が静まった。女子陣から冷たい視線が彼に注がれる。

「…………あれ? 僕今超アウェー?」

「…………」「…………」「…………」

私達が無言を貫くと、今日のお昼は諦めよつかな、と言つて彼は階段を下りていった。

「…………彼は何なの?」

星木藍がいなくなつてすぐ、七さんが呟いた。それに私達は一言で答える。

「…………女の敵だよ」

翌日、星木藍と人為七が付き合つているという噂が流れた。

## シンチレ

星木藍。成績優秀、スポーツ万能、おまけにイケメン。金髪ではあるが、授業には熱心に取り組み、教師受けも悪くはない。女子からの人気も高いが、男子にも友達が多い。が、最近悪い噂が流れている。

『そんな彼と転校生・人為七が付き合っている』

私がそれを聞いたのは、朝。その日、普段はベル着常習犯の唯が、わりかし早めに登校してきた。

「あれ？ 今日は早いね唯………… つて大丈夫？」

肩を上下させて息をする唯に、私はとうあえず尋ねる。

「や、やべーぞ」  
「？ 何がやばいの？」  
「ひ、人為さんが……」  
「七さんが？」

「星木藍と、付き合つてゐるらしい……。」

「べ、べ、別に、つ、つ、付き合つてるとかじや…………」

慌てふためく七さん。今は朝のHR前で、七さんの周りには私と

唯含め、十数人の女子が群がっている。

唯が言つ。

「でも、今日一人並んで登校してきたらしごじさん

「た、たまたま一緒になつただけだつて」

「でも、楽しそうに喋つてたつて聞いたよ」

「そ、それは……その……」

黙る七さん。うん、七さんはシンデレだな。……つて、そうじや  
なくて！

「七さん……私達、昨日言つたよね」

「……でも、言つほど悪い人には見えなかつたよ

昨日のあの後、七さんには女子の不登校多発事件について、一通  
り話してある。

にも関わらず、『レ』。星木藍の手練手管が凄いのだろうが、さ  
すがに昨日の今日では私も頭に血が上る。

「七さん、奴は本当に危険なんだよ。今まで何人の女子生徒が奴  
の手に掛かつたと思ってるの！」

「奴つて……藍さん？ ていうか、それだつて噂でしょ」

「でも、昨日七さんだつて見たじゃない！」

「あれは、…………きつと間違いだよ……」

「『間違い』つて、そんなわけ」

「何でそんなこと言つの！ あつ、まさか凜さん、藍さんの」と  
「いやいやいやいや、ないないない、絶対ない！ それはな  
い！」

「……そ、そつか……（良かつた）……」

「今『良かつた』つて」

「い、言つてない…。言つてないから

知らず知らずのうちに私と七さんの口論になつていった。結局H.R.が始まり、その場は治ましたが、私と七さんの関係にはヒビが入つた。

今回分かったことは一つ。七さんはシンデレラだといつこと、ほぼ間違いなく星木藍に惚れっこなこと。

しなつたら、星木藍を何とかするしかない。つまるところ、彼が善良な普通の男子高校生になれば問題は全て解決するのだから。となれば、善は急げ。勝負は今日の昼休みだ！

昼休みになつた。

私は一人で戦場に向かつ。まあ、隣のクラスのことなのだけど。ドアを開け、私は奴の席へと向かつ。奴の席は教室のど真ん中にあるので、机をいくつか避けながら進む。

奴は隣の女子（美人）と談笑しながら昼食を取つていた。私が奴の目の前に立つと、彼女は訝しげな視線を向けてきた。対して奴は、

「あれ、凜さんじやないですか」

と、特に驚いた風も無く、言った。

ていうか、いつの間にか呼び方が馴れ馴れしくなつていて。虫ずが走るわ。

「星木藍さん、少しお話があるのでですが」

「何の話かな、凜ちゃん」

全身の毛が逆立つのを感じる。吐き気がする。しかし、今は呼ぶ方など 気にしている暇はない。とりあえず、私は单刀直入に言つてみる。

「七さんから手を引いてくれませんか

「嫌だ」

即答だつた。まあ、予想通りだ。私としては奴を改心させるのが目的なので、動搖はしない。が、周囲の人達は静かになつた。こちらに注意を向けたようだ。

「ていうか、唐突にどうしたのかな？」

薄い笑みを浮かべたまま、奴が言った。私もなるだけ平静を装つて、返す。

「あなたが女子生徒不登校多発事件の犯人である、という噂が流れています」

「わあー、心外だなあー（棒）。俺が犯人なわけないじゃないですかー（棒）」

始終棒読み。私を嘗めているとしか思えない喋り方で、さすがに腹が立つ。

「……しらを切るつもりですか。では、昨日の泣いている少女はどうしますか」

「ナンノハナシテスカ」

「とぼけないで下さい。不登校になった子は全員、直前になんと付き合っていました。大方、酷いフリ方でもしたんじゃないですか？ 昨日の子が泣いていたのも同じ理由では？」

苛ついた私は一気にまくし立てる。が、

「やだなあ何言つてるんですか偶然ですよ偶然いやー偶然つて恐ろしつ」

……この野郎！

奴はいつまでもテキトーに答え続けた。周囲の人々が不信感を募らせるのもお構いなしか。

私は激しい憤りを感じる。同時に諦めの念が心を過ぎる。

奴は改心などしないのではないか？

だつて奴は笑っている。話しきをすればするほど、より楽しそうに顔を歪めていくのだ。それは、思い出し笑いのように見えた。

こんな奴が改心などするのだろうか。やつぱり、七さんを説得するほうが現実的ではないか？……いや、駄目だ。それでは根本的な解決にはならない。それに、諦めるには早過ぎる。頑張れば、どうにか

その時、大きな音を立ててドアが開いた。

教室中の視線が移り、私も驚いて、そちらを見る。そこには、

昨日の茶髪の女の子が、カッターを手に立っていた。

## 盾

2年A組の隣のクラス。つまりB組。に、茶髪の少女がカッター片手に乗り込んで来た。

茶髪少女は目を充血させて、ある一点を睨みつけている。カッターナイフは極限まで伸ばしている。

それを見た教室内の人々は私を含めて、全員固まっている。ただ1人、星木藍だけは薄い笑みを崩さない。

と、突然彼女が叫び出した。

「@£¶% %o+!!」

それは言葉にならぬ、何が言いたいのかさっぱり分からなかつた。が、それで私は覚醒する。他の人達は依然ポカンとしているが、その差はおそらく情報の有無だろう。

私は、彼女が奴にフラれていたのを知っている。

つまり、彼女の目的は

思考が終わる前に、彼女は奇声を上げて、こちらに向かつて來た。そこで、教室内の人達はようやく危険だと氣付いたらしく、悲鳴を上げた。多くの人は教室の隅や外に待避していく。

が、奴の右隣の席にいる美人系少女は動かなかつた。何故こちらに向かつて來るのか理解出来ていないうつだ。

茶髪少女が向かつて來る。しかし、目指す星木藍の席は教室のど真ん中にあるため、机が障害物、むしろ盾となり、彼女の行く手を

阻んでいた。彼女は舌打ちしながら、机を避けて近付いて来る。すると、今度は美人系少女が、茶髪少女の前に立ち塞がるような構図になった。

美人系少女は驚いて動けない。奴は微笑を浮かべたまま動こうとしない。

そして、茶髪少女は邪魔な少女を排除すべくカッターを振り上げた。

「危ないっ！！」

とつさに私は一人の少女の間にに入った。勝算も何もないが、生徒会長として生徒の危険を見過ごせない。

「      %！」

奇声と共にカッターが振り下ろされる。

血が宙を舞つた。

が、それは私の血ではなかつた。

カッターが私に刺さる直前、いつの間にか立ち上がつた星木藍が、その刃を左手で掴んでいた。血は彼のものだつた。

「　　...」

私達は驚いて目を見開く。

「あー、わりと痛いですねー」

彼は普段通りの軽い口調で言った。

……助けてくれた？ こんな奴が、あの星木藍が、私を？  
私は混乱する。

「……………！」

数瞬後、茶髪少女が再び暴れ出した。が、彼の手はカッターを離さない。

結局、先生達が到着して茶髪少女が取り押さえられるまで、彼はカッターを離さず、笑みも崩さなかつた。

「その…… やつめはありがと「ひー」れこました  
「いやいや、別に大したことじやありませんよ」

あの事件の後、私達は怪我をした彼の手当をすべく、保健室に来ていた。

「そんな、手もいんに深く裂けてるし…… 制服も汚れちゃって……」

「大丈夫、大丈夫。どうせ衣更えの季節だし、ブレザー着れば分かんないよ」

そう言つ彼はやつぱり笑つているが、心なしか優しい笑みに見えてくる。もしかして良い人なのでは、ともえ思つてしまつ。金髪じやなければ好きになつていたかも知れない。

「でも、私がいなければ、あなたならもつと上手く止められたような気もしますし……」「うーん、とりあえず『あなた』って辞めない? 名前で呼んでよ、凜ちゃん」

「…………星木さん」

「硬つ!…………まあいいか、それで」

やつぱり、悪い人には見えない。  
と、思った直後

「ていうか、凜ちゃんが間に入らなければ、俺も動くことはなかつただろ？から、気に病むことないよ」

……ん？

「え？ どうい？」

「凜ちゃんだから守った……ていうか、隣のあの子なら助けるつもりはなかつたんだ」

「？？？」

「何で言うかまあ、……盾？ ああいうのが来た時のために、あの席を選んで、あの子も隣にしてたんだ。盾代わりに。ほら、俺クラス委員だから、そういう小細工やすい……ってあれ？」

「…………」  
「…………」  
「…………」

「…………」

彼の問い掛けに、私は答えない。というか、答えられない。彼が良い人なのか悪い人なのか、判断がつかなかつた。

「…………とにかく、有り難うございました。では

「あ、ちょ、凜ちゃん、良真義さん……！」

私は彼を残して、保健室のドアを閉めた。

翌日、学校中は昨日の『茶髪少女事件』の話で持ち切りになつた。そんな昼休み、唯が私の前にやつて來た。

「どうしたの……つて大丈夫?」

例によつて、肩で息をしている唯。ついでに今日も隣に七さんはいない。

「や、やべーぞ!」

「?」

「人為さんが」

「……七さんが?」

「星木の奴と……」

唯は一拍開けてから、言つた。

「遊園地で、デートするらしい……。」

## 尾行

9月28日 日曜日。

星木藍と七さんの遊園地デートの日。

遊園地デート。彼・星木藍の常套手段だ。不登校になつた女子の内4人、つまり半分が直前に彼と遊園地デートの約束をしていたらしい。要するに、遊園地デート＝デツドだ。

そんな危険度MAX＆現行犯逮捕チャンスのデートを尾行しないわけにはいかない。そういう理由で私は現在、絶賛尾行中である。

が、今のところ何の問題もない。

2人共待ち合わせの10分前には遊園地に来て、その後も普通のカップルっぽい行動をしていた。怪しいところなんか一切ない。

そして、現在時刻は15時過ぎ。今は七さんのリクエストに応えて、彼が2人分のチユロスを買いに行つている。  
チユロスは少し先の角を曲がった所にある屋台で売つているため、現在彼の姿は見えない。

七さんはベンチに行儀良く腰掛けている。無駄に可愛い。

私はというと、もしかしてあのまま七さんを置き去りにする気では、と無理矢理な仮説を立てて、少し離れた物陰から七さんを眺めている。

分かつていて、無理があることぐらい。今日は何も起きないだろうことも、うつすら感づいている。

しかし、貴重な日曜日に勉強もせず、こんなところまで来てしまつたからには何かないと割に合わない。もちろん何もないのが一番

だと分かってはいるが、やはり嫌な期待をしてしまう。何か、起これ！

すると、七さんにチャラついた男達が近付いて來た。

「一つ！！」

な、何か起きたあああ！　が、全然うれしくない。むしろ、やつちまつた感が漂っている。私が念じた所為ですか！？

「へイへイ、彼女お茶しなーい？」

「ギヤハハ、お前古いって！」

「まあ、そういうことだから俺達と遊ぼうぜ」

「君カワイイね～。どこ高生？」

「お前は顔がイカツいんだよ。怯えちゃってんじゃねえか、かわいそうに（笑）」

計5人のチャラ男。

私が念じたからこんな状態になつたのかは判然としないが、でも念じたことは確かにわけで、私の胸に罪悪感が込み上げる。何とかしなければと思う。が、私一人で何とかできる状態でもない。とすれば、彼に頼るしかない。しかし、周りには彼どころか人っ子1人いない。なんて間の悪い、と私は奥歯を噛み締める。

恐らく、彼は来ないだろう。なぜなら、今なら逃げても大義名分が立つからだ。身の危険を感じたからとか、他の人を呼びに行つたとか、いくらでも。

さつきから七さんの声が聞こえない。きっと怯えているのだろう。  
私が行くしかない。意を決し、私は物陰から飛び出す。

と、突然チュロスが飛んで来て、一人の男の後頭部に突き刺さった。

## 尾行（後書き）

さて、見て下さってる方がいるか分かりませんが、とりあえず更新遅くて「めんなさい」。

そして「めんなさい」。

次も遅くなると思います。

やることがあつたりなかつたりなので、はつきりとは言えませんが

9月頃になるかなと。

誠に申し訳ありません。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けると有り難いですが、本当にすいませんなので、何かもう、「めんなさい」。

## 何だチミは！

「藍さん！」

七さんの声が異様によく響く。 原因は、左手にだけチュロスを持った星木藍、それと私だろう。

ほぼ同時に、しかし全く別の方向から私達2人が出現したため、だれもかれも混乱状態なのだ。 チヤラ男達は何とも言えない微妙な表情で、私と彼に交互に視線を向けている。

「な、何だてめえら！」

少しして、チヤラ男軍団の一人、オールバックの金髪君が声を発した。 お願いだから彼と一緒にしないで下さい。

オールバック君の問い合わせから数秒後、星木藍が口を開いた。

「……ねえ、その娘から離れてくれない？」

チヤラ男軍団の問い合わせを完全にスルーした星木藍。 そんな彼の態度を見て、チヤラ男軍団の顔から困惑の色が消える。 代わりに血管が浮いた。

「ああ！？ シカトしてんじやねえよ！」

「誰だ、つて聞いてんだろうが！」

「何だチミは！？」

「古いよ！」「」

怒声が飛ぶ。 一部ベクトルがおかしかったため、イマイチ緊張感がない。

しかし、相手は5人。ネタが古い男は小柄だが、他は全員180cm以上の長身だ。対してこちらは、七さんを含めても3人しかおらず、内2人は女子だ。戦って勝てるとは思えない。逃げたいが、七さんがチャラ男に囲まれているため、それも難しい。未だピンチだ。時間を稼いで救援を待つのが賢明だろうか。

しかし、そうそう上手くもいかず、ネタ古男が彼に近寄る。

「もつかい聞くぞ？ 何だチミはー？」

『古いよ』といつ心の声が聞こえる。

それに彼は、

「…………」

「つておい！ 黙んなよ！ そこは普通『何だチミはー』ってか？ そうです私が変なおじさぐぼえ！」

古男の熱いセリフは、星木藍の振るつた右拳によつて終わりを迎えた。

「マサー！」

「何しやがるー！」

「てめえ！ ナメたことしてんじゃねえぞー！」

チャラ男軍団がさらりヒートアップする。これでは時間稼ぎなんて出来ない。

今度はオールバック君が彼に近寄つて行く。古男とは打つて変わつて長身（田測185cm）のオールバック君。星木藍よりも背が高い。

オールバック君は咆哮を上げ、右拳を振かぶる。

「うおらああ！！」

私はとつさに目をつむる。  
そして、バキッという嫌な音が

いつまで経っても響かない。

代わりに、ドザツという何かが落つこちる音が聞こえた。

私が恐る恐る目を開けると、オールバック君が地面に突っ伏していた。顔から地面に突っ込んでいる。

一体何が起こったのかと顔を左右に振ると、七さんの座っているベンチの前で2人の男が向き合っていた。……2人？

疑問に思つと同時、視界を2つの何かが過ぎる。

それは回転している人間だつた。ズザアツという音と共に2人の人間が地面に顔から着地し、動かなくなつた。

立つているのはチャラ男1人と、星木藍。

## 何だや!!はー（後書き）

はつはー。

次は9月とか言つたのはどーの誰でしょー（現在8月11日）。全く、嘘はダメですよね。

次いで、思い付きを言つてみようのコーナーです。

最近内容が『学園もの』なのか分からなくなつております。もしかしたら、ジャンル変えをするかもしれません。しないかもしれません。』注意下さい。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けるとありがたいです。

睨み合つ最後のキャラ男と星木藍。七ちゃんはベンチに座つたままキヨトンとしている。

私の位置からだと二人の間に七さんが挟まれているように見え、さながら一人の少女を巡つて二人の男が争うという古臭い映画のワンシーンのようだ（あながち間違つてもいない）。まあ、状況や表情的にキャラ男の方が明らかに劣勢なので、映画ほどドラマチックな感じはしないけど。

「……手前、柔道でもやつてんのかよ」

キャラ男が周囲をチラチラと探しながり言った。逃げる算段でも立てているのだろうか。しかし、

「いや、俺はサッカー部だよ」

星木藍はあつさり否定した。算段を立てる暇もない。

彼がキャラ男に向かつて一步近付いた。考える時間を奪われ、プレッシャーまで掛けられたキャラ男は青ざめた顔で一步下がる。間髪入れず、星木藍は再度距離を詰める。キャラ男とは打つて変わつて、顔にはいつもの微笑が浮かんでいる。……一タブレッシャーの掛け方が上手いのは、女子7人を引きこもりに追い込んだ分のキャラの賜物だらうか。

間を空けて、星木藍がさらに一步近づく。キャラ男まであと3m。キャラ男の顔から汗がダラダラと溢れ出る。

そして、星木藍が、もう一步、

「あ……ああああああああああああ……」

耐え切れなくなつたらしいチャラ男が、絶叫して飛びかかる。拳を思いきりふりかぶつた。対して、星木藍は広げた右手を静かに前に出すだけ。よほど混乱しているのか、チャラ男はその右手に向かつて拳を突き出す。

予定調和の如く、二つの手が重なる。

が、音が鳴らない。

ぶつかる瞬間、星木藍が身体を捻り、腕を後ろに引いたのだ。チャラ男はそのまま前につんのめる。

前傾姿勢のチャラ男。そのお腹に星木藍が、躊躇なく膝を突き込んだ。

「おぶつ……！」

短く、小さい声。音や声がしなかつたのは、全員お腹をどつかれだからだったのか。

星木藍はいつの間にかチャラ男の手を握り込んでいた。膝蹴りの勢いが無くならないうちに、その手を引く。

そして、人間が宙を飛ぶ。

一回転ほどして、チャラ男が地面に突っ込んだ。

「ふう」

一息ついた彼。5人を一蹴して『ふう』なのか。

「あ……星木さん！」

言つて、七さんがベンチから立ち上がつた。最初からほどんどなかつた距離を〇まで詰めて、互いに『大丈夫?』『怪我しなかつた?』等と言い合つ。

その様子は明らかにカップルのソレで、私は安心した。もしかしたら、全部私の思い過ごしだったのかもしれない。女子不登校事件は彼とは一切関係ないのかも。

だつてカップルにしか見えないし、彼もちゃんと來たし、『星木さん』って呼んで……ってアレ? いつもは、確か、名前呼

「それで、何で良真義さんが口口口しているの?」

見ると、七さんが笑顔でこちらに指を向けていた。

## 統べペンチ（後書き）

結局ジャンル変更はしませんでした。

変えるにしても、どのジャンルにすればいいか分からず、「が主だ」という理由です。

誤字・脱字・誤表現などありましたらご報告頂けるとありがたいです。

さて、服装の話でもしましょつか。まず七さんの服装は、白いシフォンブラウスに同系色のロングカーティガン。下はピンクのスカートにロングブーツ。金髪と相まって、とてもおしゃれな感じがグッドだ。対して星木藍は白めのカットソーの上に、黒いジャケット。下も黒いジーンズで、全体的に黒く、金髪がよきらびやかに見える感じに仕上がっている。そして私は制服と。何故制服かといえば制服が好きだからで、外出時も大概制服なのだ。

「で、何でココにいるの？」

「う、つ」

健闘虚しく、七さんの笑顔から逃れることはできなかつた。

私達は今3人並んでベンチに座つてゐる（チャラ男をやつつけたあの場所のあのベンチではない。移動した）。もちろん真ん中は七さんだ。危うく地面に座られそうになつたが、星木藍いや、星木さんにフォローしてもらい、スカートが砂まみれになるのはギリギリ回避できた。が、

「で、何でココにいるの？」

隣の笑顔が恐い。やむにやまれず、私は口を開く。

「…………び…………尾行してました」

圧迫感が増す。堪える、私！

「何で？」

「そ、それは、その……」

「うう、何で質問をぶつけてくるんだ。『女子不登校事件容疑者星木さんとの遊園地デートは危険だから』なんて当人の前で言えない。なまじ、キャラ男を倒してくれたり、フォローしてもらつた後なだけに余計。

しばらへ無言でこると、七さんガ溜め息をついて言つた。

「まあ、理由はだいたい察しがつこついるけれど」

「おお、やすが七さん！」

「でも、やすがに無粋じやない？」

「おおふ、やすが七さん。緩急の付け方が上手い。そして、返す言葉もない。初デートを無断で尾行とか、無粋にもほどがある。お節介だし、空振りだし、今のところ悪役は私だ。

それでも私は善意で行動していたし、貴重な休日を無駄にしてしまつたのだ。私だって少なからずイララとしている。

「で、でも、付き合つて四日、デートつてこいつのはじつかと思うよ」

反論 否、難癖をつける。

「あれどこれとは……つてこつか、で、デートじゃないし」

……こや、シンナーはもうここよ。私が辟易してこると、

「……やつぱり、凜さんは星木さんのことが好  
きじゃない！ それはない！」

私が慌てて言つと、

「あ！ 慌てる！ じゃあやつぱり  
だから！ 違うつて言つてるでしょ！！」

感情の高ぶりを抑え切れず、私は勢いよく立ち上がった。

そして、この遊園地のマスコット シロクマ『ブラウニー』と思  
い切りぶつかつた。

「痛つ！」

私は盛大に尻餅を付ぐ。二人は目を丸くしてこっちを見ている。  
くつ、これでは結局スカートが汚れ…………ん？…………スカート？  
見ると、転んだ所為でスカートが捲れて、パン

「わああああ！－」

## 日直

「で、どんなパンツ穿いてたの？」

「……おまえはおっさんか……」

「おおう、テンション低いな」

翌日の教室。今はちょうど一時間前の休み時間だ。唯と二人、例によつて七さんはいない。

「で、唯さんがないのはやつぱり昨日の所為なの？」

「……おやうへ」

昨日のパン……ブラウニー事件の後、七さんは硬い笑顔で『私帰る。後は一人で』『ゆつくり』とだけ言つて、早足で帰り出した。さすがに、『一人で』『ゆつくり』とはいかないので、慌てて星木さんと一緒に追いかけた。が、以降は一切口をきいてくれず、今朝顔を合わせても、残念そうな、失望したような顔を向けてくるだけで、挨拶も返してくれなかつた。

「まあ、いきなりパンモロじや誘惑してると思われても仕方ないんじゃね？」

「ゆ、誘惑……」

「元々人為さんは、凜が星木藍を狙つてるとか勘違いしてたんだろ？　じゃあ尚更じやねえか。それは凜が……ってか凜の運が悪いよ」

「…………その通りで」

私はし�ょげながら、右肘の絆創膏をとにする。

「ん？ それは？」

「例のクマさんにぶつかって尻餅ついたとき、ついでに肘も擦り剥いちやつて」

「ふーん、まあそれはどうでもいいんだナビ

どうでもいいのかよ。擦り傷程度ではノーリアクションとは、さすがバスケ部のエースだけある（？）。

「どうでもいいんだけどさー」

「何？」

「今日、凜、日直じゃないの？」

誰の言葉にハツとして、ガタツと音を立てて立ち上がる。

日直。主だった仕事は日誌書きと黒板消し。基本的には一人ワンセット（名前順）なので分業するのだが、私のペアはアホ男子の中核を担うよつなアホなので、仕事は全部私がやらねばならない。そ、う、つまり、

黒板消すの、忘れてた！

慌てて黒板に走り寄るが、無情にもチャイムが鳴り響き、時間に厳格な先生が教室に入ってきた。

そして、放課後。

「はあ……」

私は溜め息をつきながら、日誌を書いている。

今日は散々な一日だった。移動教室のことを忘れて遅刻したり、全然違う問題を答えたり、体育で唯の顔面にボールをぶつけてしまつたりした。そして、日誌書きも遅々として進まず、休み時間内に書き上げられなくて現在に至るわけだが、

「……はあ、どうやつて仲直りすればいいのか

といふことばかり考えてしまい、放課後になつてから既に1時間以上が経過していた。

いつの間にか、教室からは人が消えている。無音の教室に、校庭にいる運動部の元気な声が響く。

ようやく日誌を書き終えた私は、大きく伸びをした。

何かよくわからない疲れを感じる。今日はお風呂に入つてさつさと寝よう。

そんなモアツとした思考に耽つていると、良い音を立てて教室のドアが開いた。

## 口直（後書き）

なんかノッてきたので最終回カウントダウンとかしますね。  
あと6話くらいです。  
信憑性〇です。  
誤字へなどありましたら報告頂けるとありがたいです。

「あ、先生」

「やあ、良真義さん。口説書き、進んでいますか？」

教室に入つて来たのは担任の先生だった。

「す、すいません、ちょうど終わつたところです」

「そうですか。ああ、焦らなくていいですよ。いつまで経つても来ないので、心配で見に来ただけですから」

言つて、先生は微笑む。

先生は今年で30歳、性格は穏やかで大人っぽく、授業も面白くてわかりやすいし、その上容姿も整つていて、愛用している黒縁眼鏡がよく似合うため、人気特に女子からの人気は絶大で、かく言う私も、礼儀正しく折り目正しいこの先生には、尊敬の念を抱いている。

「……大丈夫ですか？」

「へ？」

「いえ、今日は朝から様子がおかしかつたので、何か病気にでもかかっているのではと……」

「え、そんな、全然ですよ。げ、元気モリモリです」

言いながら、ラジオ体操の腕を曲げて上下に動かすアレをした。  
アホか。

「おや、その腕の絆創膏は？」

「……ああ、これは『プラウ』にぶつかりました」

「ふ、『プラウ』さん？」

どうやら先生は地元遊園地のマスコットキャラクターは知らないらしく、顔に『』を浮かべている。まあ、説明するほどのことでもないのでも、流そう。

先生は釈然としない表情を浮かべつつも、

「本当に大丈夫ですか？ 悩みがあるなら言ってしまった方がいいですよ？」

と、尚も私を気遣ってくれた。

それだけで、私はほんの少し元気を取り戻せた。親身になつてくれたから、といつよりは、私の生徒会長としてのプライドがこれ以上先生を困らせるのを良しとしなかつたため、どこかから元気を創つて来た感じだった。

私はそれを使い、腹に力を込め、ハキハキと言つた。

「いえ！ 本当に元気なので、心配しないで下さい」

どうせだからと、超ハイスピードにしてミッキンミッキンも続ける。

私の様子を見て、さすがの先生も若干引いた。口角を不自然に引き攣らせながら、先生は言つた。

「そ、ですか？」

「そうです！ では、先生、ちょっとなー。」

私は最後までムツキンしながら教室を出た。

ガラシと音を立ててドアを閉める。

……う、腕が痛い。

高速ムツキンの所為で腕がパンパンになつた私。しかし、今朝よ  
りは元気になつた。元気と口に出すことと、実際に元気になる。成  
程、これが言霊か。そんな新発見も私に更なる力を与えてくれた。  
私は誰もいない廊下を歩きながら、一つのことを決意する。

明日、七さんとちやんと話し合おう。

拳を握り、私は明日の戦いに想いを馳せる。

と、突然後頭部に衝撃が走つた。

「がつ…………！？」

私はそのまま前に倒れ込む。顔を打つた痛みを感じたのもつかの  
間、1秒後に背中に電流が走る。

「（スツ、スタン……が……）」

視界が暗闇に包まれた。

## 四三（後書き）

あと5話です。

今のところ延長はありませんね。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けると助かります。

腕にビリビリとした感覚を覚え目を覚ますと、そこは廃倉庫だつた。照明器具に照らされた倉庫内。私は冷たい埃まみれの床に仰向けて寝かされていた。

「キヤハハ！ 起こしちゃつた？？」

すぐ右隣りから聞こえた声に、私は顔を向ける。

そこにいたのは、私服で黒いサラサラの髪をサイドポニーにしている同い年くらいの美少女。見覚えは、ない。彼女はニタニタ笑つて、私の右肘を突いた。

「いつ！」

腕に痛みが走る。とつさに腕を動かして彼女のシンシン攻撃を避ける。そこで初めて腕に手錠がかけられていることに気付いた。

「なつ、何これ！？」

「キヤハハ！ 気付くのおつそーい！」

彼女は両手を打ち鳴らしながら、狂ったように笑う。身の毛がよ立つのを感じる。

直後、今度は私のすぐ左から呻くような声がした。仰向けのまま、首だけをそちらに向ける。

そこには、同じように手錠をかけられた制服姿の七さん。

そして、天井から垂れている鎖に腕を巻かれ、かろうじて床に付いている足も縄で縛られ、額から一筋の血を流した、やはり制服姿の星木さんがいた。

「七さん！ 星木さん！」

思わず2人の名前を叫ぶと、うるせー、と頭を蹴られた。私達がいるのははどうやら倉庫の隅らしい、とかズレた考えが頭に浮かぶ。

「おい、その辺にしどけ  
「だよだよ、次あたしの番でしょーー！」

今度も左から、しかしかなり離れたところから、知らない声が聞こえた。見ると、やはり知らない、7人の美少女がいた。  
……7人。

「……ああ、久しぶりですね」

突然、よく知っている声がした。やや、弱々しいがいつもの軽薄な口調。再度顔を向けると、星木さんが血を流しながらも、いつもの微笑を浮かべて喋っていた。

「本当に久しぶりです。引きこもり生活は楽しかったですか？」

彼の口から発せられた『引きこもり』という言葉。……じゃあ、やはり彼女達は不登校事件の……。  
と、その時

「ほおおおしきーー！」

1人の少女が絶叫した。驚いて目をやると、彼女はなんと懐から抜き身のナイフを取り出した。

「何よアレ」

弱々しく、儚い感じの七さんの声がした。起きたのかと一瞬だけそちらを見るが、今はナイフ少女の方が問題だ。私は視線を戻すと、ナイフ少女が他の娘に組み伏せられていた。

……仲間割れ？

「離せ！ わたしがあいつを殺すんだ！」

「ふざけんな。あいつは全員で殺るつて決めただろうが」

物騒なことを言い合ひ、美少女達。

「わたしがわたしがわたしが！！」

「ちつ！ おい、誰かスタンガン貸せ！！」

言い終わると同時に、前髪の長い美少女がスタンガンを差し出す。受け取った茶髪縦ロールの少女は、恍惚の表情を浮かべ、舌なめずりをして、躊躇なくナイフ少女の背中にスタンガン突き付けた。

## 7人（後書き）

……あと、5話以上かかります。

あれ？

おかしいぞ？？

どこを間違えた？？？

誤字・脱字・誤表現などありましたら「報告頂けるとありがたいです。

## 言葉使い

絶叫が廃倉庫に響く。私は80mほど離れた場所で起立っている  
凄惨な光景に、目が釘付けになる。

「……ひつ、ヒヤハハはははーー！」

スタンガンを持っている、縦ロールが笑い声を上げた。悲鳴と交  
わり、不快な旋律となつて響き渡る。私はあまりの氣味悪さに、堪  
らず言葉を漏らす。

「……狂ってる」

「はあ？ 何言つてんだし。全部そいつの思惑通りなんだろ？」

私の隣にいたサイドポニーが星木さんを指差して、言った。

「え？」

「わざと挑発して、仲間割れを誘発させる。アハハ！ 上手いね  
ー、何かのプロか、そいつは」

言葉は笑つているが、顔は憎悪に満ちている。私は、今日何度目  
かの悪寒に襲われる。

私が奮えていると、ふつ、という声がした。見ると、星木さんが  
笑つている。

「人の心を弄ぶプロは、てめえらだうづが」

その言葉使いに、私は驚愕する。

「アハハ！　良いのかよ、素が出ちゃつてゐるぜ？」

彼女の言葉に、星木さんはこちらをチラフツと見た。

「……確かに良真義さん達の前でこんな言葉は使いたくありませんでしたが、てめえらに丁寧な言葉を使う方がありえねえよ」

彼はサイドポニーとは対照的に、顔は笑つて言葉は怒つていて。いつものエセ紳士っぽい喋り方はどうしたのか。

しかし、続く彼の言葉で、その疑問は半ば解消される。

「てめえらみたいなクソ売女にはこれで十分だ」

今度は、言葉も表情も憎悪にまみれていた。特に『売女』という単語には、彼の持つありつたけの憎悪が込められていたように感じた。

『売女』　女を、売る。

「……ああ、やっぱり知つてやがったのか」

いつの間にか、不快な旋律は止み、倉庫内は静かになっていた。あの7人　いや、1人減つて6人も、こちらを見ている。

「知つてるぜ」

星木さんが言った。

「てめえらが援交したことへりにな

援助……交際？ まさか、うちの学校はまがりなりにも進学校だ。  
そんな話、この2年で一度も聞いたことはなかつた。  
なのに、

「ちえつ、どつかからばれたんだよ」

舌打ち混じりに吐き出された彼女の言葉は、星木さんの言葉を暗に肯定していた。

私が呆然としていると、彼女の唇に星木さんが答えた。

「確かに、てめえらの隠蔽は完璧だった。どつかのオッサンとヤル分にはな。ただ、それで調子に乗つてやり過ぎたのが、てめえらの運の尽きだつたんだ」

彼の言葉は徐々に震えていった。必死に怒りを堪えているのか、彼の唇から、血が流れ出る。

「クソ売女共が。俺のダチにまで手を出しあがつて……！」

## 言葉使い（後書き）

あと5話くらいです

……そろそろカウントダウン辞めようかな。

……誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けると助かります。

## 男の味方

「外霧巧<sup>そとぎりたくみ</sup>つて覚えてるか」

星木さんの言葉は小さく、私の隣のサイドポニーにしか伝わらない。

「ワタシ知らなーい。ねえ、外霧巧とかいうやつ知ってるー？」

サイドポニーは否定とともに、拡声器の役割もしてくれた。が、80m先の6人も、全員『知らなーい』と返す。

と、

「2年B組18番、てめえが引きこもりに追い込んだ男だろ？」「海耳未美！」

星木さんが、いつも彼からは想像もつかないような叫び声を上げた。それに反応したのは向こうにいる6人の内の1人、帽子を被った幼い感じの少女だった。

「……あつ、アレだ！あのデブオタメガネだ！へえー、あいつ不登校になつたんだー！」

海耳と呼ばれた少女がキヤハハ～と笑う。それを見て、彼は更に叫ぶ。

「てめえが身体使って、金を貢がせたあげく捨てたから、あいつは引きこもりになつちましたんだろうが！」

「エロい言い方やめろしー。ちょっと話しかけて、金くれって言

つただけで、身体なんか使ってねーよ

海耳はもう一度キヤハハ～と笑った。

「てかさ、あたしが親から金せびつて来いつて言つたら、あいつゲーム売つてきてさー。『ぼ、ぼくの宝物のゲームを売つたから、き、きみがぼくの宝物になつてくれないか』とか、きつしょいこと言つてきてさー」

「アハハ！ 何それ、キモーカイ！」

「でしょ、だから金だけ受け取つて、『ごめんなさい、タイプじゃないの』って言つたら、あいつ泣き出してさー（笑）」

彼女達の不快な笑い声が倉庫内に響く。それを見て、星木さんは目を細めた。怒りが頂点を越したのか、むしろ冷静な声で彼は喋る。

「他にも、俺のダチがてめえらの所為で引きこもりになつた。でも、オタクとか気の弱い男子が引きこもりになるなんてよくある話だから、問題にすらならなかつた。……うちの学校は放任主義だしな」

彼は下を向き、目を閉じる。そしてすぐに顔を上げ、言つた。

「だから、俺がそいつらの、男の味方になるつて決めたんだ！」

『女の敵』ではなく『男の味方』。

彼の言葉に彼女達は顔をしかめた。

「ハツ、そいつらの無念を晴らすために、あたしらを不登校に追い込んだ、つてか？」

「ああ。……てめえらに騙された奴らからも頼まれたしな。だから、てめえらみたいなクソ女と付き合った。あいつらの気持ちをためえらクズに味わわせるためになー！」

彼の言葉に、とうとう彼女達全員が激昂する。

「ーっ！　てめえ！」

「ふざけんな、星木いーー！」

大量の罵声が飛び交う中、私は1人の少女を思い出す。それは、星木さんの隣に座っていた美人系少女。彼が盾と呼んだあの娘も、彼女達と同じようなことをしていたのだろう。故の、盾扱い。

と、そこで一つの疑問が浮かぶ。

……あれ？　じゃあ、七せんは？

## しかしまむかの勘違い

ガツ、という嫌な音を聞き、私は現実に戻った。

見ると、頭から更に血を流した星木さんと、その辺に転がっていた鉄パイプを持った、サイドポニーがいた。

「！」「ほし」

「藍さん…！」

私の言葉を七さんの叫び声が遮った。七さんは起き上がり、手錠がついた状態で星木さんに飛び付く。それを見たサイドポニーは、ねえよ気色悪い！！

「『藍さん』だつて、キャハハハハ！ 下の名前で呼んでんじゃねえよ気色悪い！！」

言つて、鉄パイプを振り上げた。今度は照準が七さんに向いている。反射的に私は間に入ろうとするが、

「その辺にしどけ！ 独り占めは許さねえぞ！」

遠くから縦ロールがストップをかける。それを聞き、サイドポニーは舌打ちして数歩下がつた。

私はとりあえず一息着く。が、七さんと星木さんはまつ先に互いの心配をしていた。それを見て、私は先程の疑問を打ち消す。きっと、2人は本当に愛し合っているんだ。裏も表もなく、純粋に。根拠はないが、私はそう思つ。

そこへ、不粹な声が響く。

「ハツ、今度はそいつらがターゲットか？」

……「？」

「ま、何でもいいけどな。ただ、そいつらは可愛しがれ？ 現在進行形でてめえと付き合つている所為で、ついでにまとめてわたし達に殺」

「ちよつと待つて」

思わず縦ロールのセリフを遮る私。いやだつて

「私、星木さんの彼女じゃないんだけど！？」

私は渾身のツッコミを決めた。

……最初から疑問には思つていたのだ。何故私まで、と。本命が星木さんなら、七さんはともかく何で私まで、と。

しかしさかの勘違い！？

すると、縦ロールが口を開いた。

「……ハツ、自分で逃げよつ、つてか？ 甘えんだよ、ネタはちゃんと上がつてんだ」

「ね、ネタ？」

「じらばつくれんな、あんたら3人で遊園地に行つたんだろーが！ 楽しそうに3人仲良く、遊園地から出て来たところを見たやつがいたんだよ！」

……確かに帰りは3人一緒だったけども、何でよりによつてその場面！？ しかも何だ『楽しそう』って！？ ビコをビコ見たらア

レが『楽しそう』に見えたんでせうかーー?  
私は啞然として声が出ない。と、

「ハツ、認めたか」

認めてない認めてない! 胸中で必死に否定する私。しかし、相手が完全に誤解しているため、どう否定すればいいかわからない。

「じゃあ、そろそろ殺つちまおうぜ」

縦ロールの言葉に、向こうにいる6人と、サイドポニーは様々な武器を構える。次いで、6人がサイドポニーの隣にまでやつて来る。後腐れないように同時に飛び掛かつてくるつもりらしい。

私はとにかく周囲を見回すが、口々は倉庫の隅なので、完全に囮まれている。星木さんは吊されているし、七さんは星木さんから離れようとしてない。

どうする、私! そのままでは勘違いで殺されるーー!

## しかしまわかの勘違い（後書き）

あと5話（以上）です

そして、今回は某有名ワードベルツぼく仕上がっております（タイトルの語呂と、本文の一箇所だけですが）。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けるとありがたいです。

武器

———じせんけんほん！！

えー、負けー！？

一が二二たあああーー！」

突如開かれたじゃんけん大会。既に3回戦目なのでやや緊張感が薄れているが、コレは誰が誰を殺すのかを決めるという物騒極まりないじょんけんなのである。

「よーし、決まったね。なつちゃんとしおりんはその生徒会長担当ー。」

「あー、せめてそつちの金髪がよかつたー！」  
「わかつた」

こうして、約5分の死闘の末、私達を殺す準備は整つた。

三日月の夜は、月一回しか見られない。

私は前後左右、天井や床にまで視線を巡らしたが、結局何の打開策も浮かばなかつた。大声で助けを呼ぼうかとも考えたが、先程の怒鳴り合いから随分経つのに人つ子一人来ないので。おそらく意味は無いだろう。結局、誰かが助けに来てくれるのを祈るしかなかつた。

誰か、助けて！

しかし、そんぞう上手く行くはずもなく、

「じゃあ、カウントダウン行くよー」

すつかりリーダー然とした縦口ールによる、無情なカウントダウ  
ンが響くだけだつた。

「さーん」

私は往生際悪く、再び周囲を伺う。しかし、打開策は見つからず、星木さんの服をギュッと握っている七さんが目に入るばかりだった。

卷之三

私はしゃがんだまま目を閉じ、最後まで祈り続ける。

二十一

誰か！

「ゼロオオオー！」

助けて！！

その時、私の頭上を何かが通り過ぎた。

ガガガガガガガツ、という音と共に7つの呻き声が上がる。私は

驚き、顔を上げた。

星木さんの服を掴み、彼を武器のように振り回す七さんの姿が目に映った。

「はー!?」

どうやら七さんは、星木さんが吊されているのを良いことに、彼の服を掴んだまま両手を思いっきりスイングしたらしく（その前に、彼の縛られている両足を蹴り上げるという行程があったようだが私は見ていなかつた）。

結果、彼の身体は回り、彼の脚が向かって来た7人の美少女を、文字通り一蹴したのだった。

ただし、彼女達は武器を構えていたため、当然そのうちのいくつかは彼の脚に当たり

「痛つー！」

星木さんが叫び声を上げた。……いや、当たり前だらつ。七さんは彼氏をどんな使い方しているんだ。

そう思い七さんを見ると、彼女は何の未練もなさそつに星木さんの身体を手放し、猛然と走り出した。

向かう先は、吹き飛ばされた縦ロール。走り寄った七さんは、その勢いのまま、縦ロールの頭を蹴り飛ばした。

「ぐえーー！」

短い悲鳴を上げ、完全に気絶する縦ロール。の、身体をまさぐり出す七さん。そして七さんは、ちょっと言いにくいところから、鍵の束らしき物を引っ張り出して、言った。

「パンゴー！」

## 武器（後書き）

あとち語です。

アレ？ 前回はあとち語とか書いたよ'うな気がしますが……。うん、  
まあよし。

## あーん

鍵の束。といつても、鍵は3本しかなく、隠し持つておくためか、小さいリングに紐でそれぞれ結わえているという、何ともお粗末な作りだ。そのため、七さんが手錠を外すのに、10秒もからなかつた。

「凜さん、バス！」

言つて、七さんは鍵の束を放り投げて來た。私は慌てそれを受け取り、苦心して解錠する。

その間に、『ホゲツ！』といつさつきと似たような声を聞いたが、私は解錠に必死だったため顔は上げなかつた。

そして、ようやく手錠が外れ、軽い解放感を味わつていると、

「凜さん、コレもバス！」

といつ声と共に、また何か投げられた。ナイフだった。

「つて、キャーーー？」

私はややオーバーにナイフを避ける。

「凜さん、ちゃんと取つて！」

「無理だよーーー？」

と、ツッコミを入れてから氣付いた。

……あれ、いつの間にか『凜さん』つて。

「コレが俗に『吊橋効果』か、と私が納得し、ついでに嬉しくなつてニヤニヤしてくると、七さんが言った。

「凜さん！ 早く星木の拘束も解いて！」

…………『星木』？ 名字呼び？ 今まででは確か『藍さん』だつたはずなのに？ 何で？ 逆吊橋効果？

思えば七さんの行動は、さつきから不可解なものばかりだった。彼氏を武器代わりに使つたり、痛みを訴えている彼氏をあつさり離したり。……あ、愛し合っているんじゃなかつたの？

脳内が疑問符で埋め尽くされ、私はしばらくフリーズした。

「…………あの、良真義さん？」

頭上から降つてきた声に、私はハッとする。顔を向けると、星木さんが汗を流して苦笑していた。彼は言った。

「あいつの所為で脚が痛いので、早く拘束を解いてくれません？」

…………『あいつ』って、七さん？

またも私は困惑する。が、とにかく星木さんを助けるのが先決だと思い直し、七さんに渡されたナイフを拾つた。

まず、足の縄を切る。次いで上を向き、腕の拘束を確認する。と、彼の腕にも手錠がかけられており、それを中心に鎖が巻かれていた。これなら、手錠を外せば鎖からも脱出できるかも知れない。しかし、どうにも位置が高すぎる。私が背伸びしても手錠までは届かない。どうしよう。

私が悩んでいると、

「良真義さん、鍵貸してくれませんか」

と、星木さんが言つた。……いや、貸しても何も、どこに渡せば？ 私の表情から考へていることを読み取つたらしい星木さんは、更に言葉を続けた。

「ハハ、ハハ。口元、あーん」

……何故に笑顔？ 何となく下心が垣間見えたような気がしたが、私は『無言』で鍵束を差し出す。すると、彼はやや残念そうな顔を見せ、明らかにテンションを下げながら、口で鍵束を受け取つた。

## あーん(後書き)

あと5話以上……って、もうここよー。

本当にすいませんでした!

もう一度とかウントダウンなんかつませんーーー！

彼は鍵を1本口から出し、腕の力で身体を持ち上げた。彼はその鍵を右の穴に差し込み、何度も力チャカチャ音を立てたがどうやら違つたらしく、腕から力を抜き、床に足を着く。が、間を空けず、口内で次の鍵と取り替え、再チャレンジ。今度は合つたようで、数秒後、彼は鎖から解き放たれた。

「いやー、助かりました、良真義さん……ってあれ？」

私は既に星木さんの方を見てはいなかつた。七さんのことが気になつたのだ。

私は周囲に目をやる。と、氣絶しているらしい美少女が、既に（最初のナイフ少女含め）6人にまで増えている。

そして今、七さんは2人の少女と相対していた。3人は廃倉庫の中央に、正三角形を描くように位置している。七さんはナイフ、2人の少女はナイフとスタンガンを、それぞれ所持しているため、全員軽はずみには動けず、膠着状態になつていた。

私はナイフを握り直し、加勢に向かおうとした。が、その肩を星木さんに掴まれた。

「待つて待つて、危ないですよ」

「でも七さんが！」

「大丈夫ですよ。2人くらいならあいつに任せましょ！」

その言葉に、私は愕然とする。

「ま、『任せましょ！』って、七さんは彼女でしょ！ 心配じや

ないんですか！」

私は怒りを込めて彼に問う。すると、彼は苦笑いを浮かべ、そして何故か大きな声で、言った。

「とりあえず、俺とあいつは付き合つてませんよーー。」

彼の言葉に、

「ええっ！？」

「はあ！？」

「……！？」

私と、七さんと相対している2人の少女が反応した。どうやら途中から、私達の会話が聞こえていたらしい。故の、リアクション。その瞬間、

「はっ！ー！」

少年漫画然とした声を上げ、七さんはナイフを投げた。注意の逸れていたスタンガン少女に向かつてナイフが飛ぶ。が、スタンガン少女は身体を捻り、ソレを避けた。

七さんの目が大きく見開かれる。その表情は、起死回生の策が失敗したことを如実に表していた。

それを見て、ナイフを持つている少女が、七さんへ向けて走り出す。しかし、七さんは未だにスタンガン少女の方を向いてる。やられる！ そう思い、私は七さんの名を呼ぼうとするが、遅か

つた。既にナイフの射程圏内。少女はナイフを大きく振り被り

その鳩尾に、七さんの後ろ回し蹴りが炸裂した。

「どうした？」

まさかの反撃に、少女は成す術もなく吹き飛ばされた。理解できないといった顔の少女。その顔を、七さんは走り寄つて蹴り飛ばした。

それで、その娘は完全に意識を失い、残る1人となとなつたスタンガン少女は顔面を蒼白にする。彼女は、先程のありえない反撃を思い浮かべているのか、

「化物」

と、言葉を漏らした。それに七せんは言い返す。

「人聞き悪いわね。私は化け物じやないわ。強いて言うなら偽物

۱۹۴

## 偽物（後書き）

『化物』に『偽物』

何のことか、分かる人には分かります（多分）

まあ、私の好きな作家が分かるだけなので、ピンと来なくても問題ありません

## 真逆の流れが蹴り飛ばすフリフリ

「『偽物』って……？ それに、何となくキャラが違うような……」

「それがつまり、『偽物』ってことでしょう」

「へ？」

それに星木さんは笑顔で答えた。が、何のことやらさっぱり分からぬ。彼は構わず七さんの方へ歩き出した。

「人為、代わろうか？」

「ん、そうね。お願ひ」

それだけの会話で完璧に意思を疎通させる2人。その息ピッタリさ加減はカップルのソレに見えなくもないが、話している空気は完全に他人のソレである。……じゃあ、本当に2人は付き合ってない？

星木さんはスタンガン少女に向かつてゆっくりと歩を進める。七さんは左手を腰に当て、その場からは1歩も動かない。

真逆。

思い返せば、2人の行動はいつも真逆だったような気がする。喋っている時は黙つて、動いている時は止まって。同じ行動なんて、イチャイチャしたり、互いを気遣い合う時くらいだったようなんでも、2人は付き合っていない…………？

その時、スタンガン少女が声を発した。

「…………ほし……さ……あ、あああああーーー！」

スタンガン少女が発狂して絶叫した。彼女はスタンガンを突き出し、星木さんに向かって猛然と駆け出す。私は息を呑む。が、彼は落ち着き払つて、シンプルに対処した。すなわち

少女の顔面を、蹴り飛ばす。

「おべつーー！」

言つて彼女は良い感じにスリップ、宙に浮く。そして半秒後、後頭部を盛大に打ち付けた。

「…………うわあ…………」

10秒にも満たないアクションだったが、私は十一分に衝撃を受けた。といふか引いた。星木さんに。いくら何でも、女の子の顔面を。

「ふう…………」

星木さんは一息ついて汗を拭つた。いやいや、おかしい。この場面でその爽やかさはおかしい！人道的倫理的常識的におか

「あれ、凜さんどうかしました？」

どうかしてるよー。ただし私じゃなく星木さんの頭だけね！  
とは言えない。とりあえず、私は話を変える。幸い、聞きたいことなら山ほどあった。

「つていうか、2人は本当に付き合つてないんですか！？」

七さんがこちらを振り返る。私は一抹の望みを込めて、彼らの顔を直視した。この質問、私は『ノン』を期待していたのだ。が、

「あ、はい。付き合ってませんでした」

「うん、付き合った『フリ』

何故か2人は清々しさを滲ませて言つた。

「二十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十」

「そういう意味ではラッキーだつたわ」

二二二、リラックスの仕事法

ヒラタ・アキラ著

「……じゃ、じゃあ、何で付き合つてゐるフリなんか！？」

色々乱れただけれど、  
気にしない。

「……何でって、ねえ」

「そうね、何でと言われても……」

2人は困ったように顔を見合わせ、言った。

「……流れ？」

## 真逆の流れが蹴り飛ばすフリフリ（後書き）

良真義凜　名字は、眞面目で善良で正義キャラの意味を込めて

人為七　名字は、『偽』で

星木藍　名字は、『せいろ』で

城峰唯　名字は、『じょうほう』で

（　城峰唯は一応、情報通キャラといった設定でした）

どうですか！　この私のネーミングセンスの無むー。もう、誰か助けてくださいー！

それと、今回のサブタイトルは今まで一番テキトーに決めました。

キャラなんて気にはんな

「ああ！　流れね！　そつかあ流れかあ……つて納得できるかあ  
！！　省略し過ぎだうー。ちゃんと一から説明せいつー！」

「り、凜さん！？」キャラが崩壊してるわよ？」

知らん！ キヤラなんか気にすんなあ！

「落の着ひてますう！」中野一瞬の着物のままですう。氣付いて

なにでわつわと話して下さげまつげほつぐせつーーー」

.... セーラー服ば、息するの忘れてた。

「り、凜さん！ ちよつ、一回深呼吸しよ、スーサーって。スー  
ツ、ハー！」

「……だ、大丈夫？」

ゆっくり呼吸し、息を整える私。と、2人の心配そうな顔が目に  
入った。……いけない、いけない、私が取り乱してどうするのよ。

「……良真義さん」

「大丈夫。それより、本題に戻ろう。……何で2人は付き合つて

るフリなんかしたの?」

私は話を戻すべく早口でまくし立てる。ついでに、身振り手振りも付け加えて。

2人の表情は依然として変わらなかつたが、それでも話してくれる気にはなつたようだつた。まず星木さんが口を開いた。

「えーと、最初から話すとなると一週間くらい前まで遡らないといけないといけないんですけど」

「凜さん、屋上で彼と鉢合わせした日のこと覚えてる?」

私は即座に思い出す。星木さんと対面しようと思っていたが、人為さんが転校して来て断念、しかし偶然遭遇してしまつたあの日だ。

「あつちでぶつ倒れてる茶髪の子をふつたあの日ですよ」

星木さんは笑いながら指を差した。指の先には、真っ先に氣絶させられた茶髪の少女が倒れている。

「はつは〜、まあないですね」

心底楽しそうに笑う星木さん。……彼女達に対しても本当に容赦ないなあ。だんだん慣れてきた私は、それをスルーして、人為さんに先を促した。

「それでね、あの日屋上で、私は彼を一日見て思つたの」

……おお?

「そうだな、俺も一日見て思つた」

おおおおおお！？

2人は顔を見合わせて笑い合っている。

何コレまさかここへ来て、まさかまさかの大どん返し！？  
実は付き合つたフリといつのも嘘で、実は実は、一旦惚

「「こいつ、悪い奴だなー、つて」」

「.....は？」

## 偽ツインテレ

呆然とする私をよそに、一人はペラペラ喋り続ける。

「なんと言いますか。嘘をついてる者同士、何かを感じたんですよ。俺はほら、糞女子と接していたわけですから、そういうアンテナは敏感で」

「私の場合は普通に長年の勘ね。まあ、結局私達一人とも悪人じやなかつたけど」

……普通に長年の勘？

「いや、人為は悪人だろ」

「えー、ただキャラ作つてただけよ？ 普通の世間一般の女子高校生じゃない？」

普通……？

「ツンデレキャラをあのクオリティで再現できる奴を普通の女子高校生とは呼ばない。詐欺師と呼ぶ」

星木さんの的確なツッコミに、七さんはややムスッとした。

「そんなこと言つたら星木だつて相当じゃない。笑顔で女の子蹴り飛ばす男子高校生なんて普通じやないわ」

「そうだな、俺は正義の味方だからな」

正義……？

「……いや、正義の味方でもないわよ」

今度は七さんが、呆れたようになシッコんだ。色々な意味で七さん  
に同意だ。

「でか、あいつらはいいんだよ。特別なの。特別なクズなの」

星木さんは弁解（？）を口にする。と、

「ふふふ。特別なのは、あの娘達だけかしら」

七さんが底意地の悪わざつな笑みを浮かべ、言つた。それに星木さ  
んは、

「ひ！？ おまつ……（お前やつぱ氣付いてたのかよ）」

思い切り狼狽し、急にヒソヒソ声になつた。

原因はどう考へても先程の七さんの意味深長なセリフだが、私には何のことかわつぱり分からない。

「（当たり前じゃない。だからあんなこと言つてあげたのに）。（元

あなたに度胸があればなー！」

「（いやいや、無理だったって。あれはあれで正解だったんだよ）

「はあ、情けないわ。それでも男？」

「うるさい、偽者」

「あら心外。せめて『偽ツンデレ』と言つてほしこわ」

……何やらヒートアップし始めた。

「変わんねえよ。『偽者』で十分だつての」

「ふうん。いいんだ、そんなこと言つちやつて。りつんさん、あのね」

「申し訳ございませんでした！」

「ふつ、分かれば良いわ」

収束した……らしい。

「……それで、似た者同士つて分かつて、どうじて付き合つフリを？」

二人に任せていたらいつまで経つても話が進まないようなので、仕方なく私が話を元に戻す。

「ああ。いや、だからつまり俺は糞女狩りのつもりで言い寄つて」

「私は胡散臭い彼の情報を得るために承諾したのだけど」

「付き合つてみたらそんな悪い奴でもなくて」

「逆に付き合うフリを辞めづらくなつてしまつたというわけよ」

胸を張る一人に、私は

「……はあ、そうですか」

としか言えなかつた。

全身を倦怠感が包む。なんだか、一刻も早く帰つて寝たい気分だ。

私は重たく感じる脚を前へ進める。

同時、首にナイフを突き付けられた。

## 偽シンナー（後書き）

『男の味方』『偽シンナー』

これらを思いつき、使ってみたいたいなー、とか思つて、この話が誕生しました。

バリバリ見切り発車だったのですが、終われそ�で何よりです。

あとタイトルは、『嘘嘘』にしようと思つていましたが、何となく嫌で、字面が似ている『虚虚』にしました。

『嘘嘘』にすれば良かつた。

## けーせー再逆転

首に、ナイフが突き付けられる。私が右手に持っていたナイフを、手ごと掴まれて。

完全に気を抜いていた。そのため、彼女 確か、『なつちゃん』と呼ばれていたサイドテールの美少女が起き上がりたことに、私達は全く気がつかなかつた。

「キヤハ。けーせー再逆転。ダメだし、とどめはもつと念入りに刺さなきや」

「……そうね。これは私のミスだわ。壁にキスしたままピクリともしないから、てっきり逝っちゃつたものとばかり」

「残一念、逝つて帰つて来ちゃつた。てめえらが長話してゐ間にー。ほら、しおりんも起きて」

彼女の言葉に反応して、倉庫の隅に転がつていた、もう一人の美女少女が顔を上げる。

……そうだ。確かに『なつちゃん』と『しおりん』は私を殺す担当だった。私達が転がされていたのは倉庫の隅。一番右端の私の担当ということとは、7人の中で彼女達が一番壁際にいたということ。だから多分、彼女達は蹴り飛ばされた時、壁に頭を打ち気絶したのだ。さつきの、星木さんを解放する間に七さんが五人の女の子を倒したということに、私は若干の違和感を感じていた。しかし、二人が頭を打つていて、実際は三人しか倒していなかつたのなら納得がいく。

つまり、彼女達は七さんとどめを刺されていないのだ。

『しおりん』と呼ばれた黒髪パツツン美少女が近づいて来る。私はとっさに腕に力をいれる。が、ほとんど動かせない。しかも、ナイフを持った手を被つようには掴まれて、ナイフを離すこともできない。万力に挟まれているようだ。明らかに普通の少女の力ではない。

「さつてと、話はだいたい聞かせてもらつたわ」

「なつちゃん、私あんまり話聞いてない」

「……しおりんうるさい。茶々いれないとよ」

「むー、何か不平等」

「いいから黙つててつてば」

わーわー口論が始まつた。緊張感に欠ける。  
と、星木さんが静かに右足を一步

「つと、動かないで、星木藍」

「そつちの女も」

彼女達の牽制を受け、星木さんは仕方なく足を戻し、七さんは眉をひそめた。

「キヤハ、ちょっとでも動けばこいつの喉をかつ切るよ?」

『なつちゃん』のセリフに全身が粟立つ。今更ながら、嫌な汗が吹き出す。と、星木さんが叫んだ。

「ふざけんな! 話を聞いてたんなら分かるだろ! 良真義さんは

「

「分かつてゐる、この女は本当に関係ないらしいねー」

星木さんの言葉を遮って『なつひちゃん』は叫んだ。しかし、星木さんは間髪いれず再び叫ぶ。

「じゃあ良真義さんを離せよー。ひとと俺を殺ればいいだろー。」

声を荒げる星木さん。対照的に、『なつひちゃん』は静かに叫ぶ。

「やうだね。確かにその通り」

そして、『なつちゃん』は私の首にさわにナイフを近づけた。

「え？」

「ナビ、やつぱりこいつは殺すから。だって、ここのこと好きなん  
だろ、星木さん？」

## けーせー再逆転（後書き）

あと三話でしめ（られるよつて頑張り）ます。

と、いいですか、あんまり聞か空かないように頑張り『たい』です。  
誤字・脱字・誤表現などありましたら報告いただければ幸いです。

「……………へ？」

何を、言っているの？

「『へ？』じゃないし。いつまでも猫被つてゐるだよ。全く、あつちの偽シンテレ以上に厚いツラの皮だよなー、生徒会長やん」

だから、何を言つて？

「まあ、あつちの偽シンテレのが詐欺師としては上だけどね。完璧騙されたし。まさか、付き合つてゐる相手を武器として扱うなんて思わないもん」

「みーちゃんにナイフかわされた後の表情も、あれ演技でしょ？  
凄いよね」

キヤハハと笑う彼女達。その振動でナイフが若干皮膚を裂き、首筋から少量の血が流れ出した。しかし、そんなことは気にならない。

「……………ど、どうこう？ 星木、さんが…………？」  
「は？ だからもういいって。かまとどぶんなくて。気付かねーわけないじやん。言葉遣いが明らかに違つてんだから」

言葉……遣い？

「あんたと他の奴らに対する言葉遣いの違いだよ。星木藍、ウチらここは雑な言葉遣いなのに、あんたにだけは敬語じやん」

「……………それは、あなた達だけ」

「そつちの女にも敬語なんか使ってないし。てかあいつがウチらの学校で先コー以外に敬語使うのはあんただけ」「辞めろ！…」

怒鳴り声。もうかなり聞き慣れた、その声。見ると、

顔を真っ赤にして下を向いている星木さんの姿が。

「は？　え、もしかして？」  
「隠してた、つもりだったの？」

『なつちゃん』『しおりん』の問い掛けに、星木さんは答えない。

「ふつ。アハハハハ！！　えー、嘘、マジで！？」  
「隠せてたの？　あれで？　気付いてなかつたの？　ほんとに？？」

『しおりん』が本氣で驚いたという顔で私に問い合わせてきた。応えることは、できない。顔が、火照っていくを感じる。

「キヤハハハ、かつわいー！　一人して顔真っ赤にしちゃつたら。  
キヤハハハハ！…」  
「そーだ！　告白させない？　告白！」  
「いいね、それ！　ねえ、星木君。今からこの娘に告白しよう。しないと殺しちゃうよー？　キヤハハハハハハ！…」  
「アハハハハ！…」

哄笑が、響く。

「早く早く」「クレよ。早くしないと、ぶつれつ殺されちゃうよー。」

『しおりん』が右肘のかさぶたに触れる。そして、ニンマリ笑つて、それを剥がした。思い切り。

「おひつ」

皮膚ごとかさぶたが引きちぎられた痛みに、さすがに悲鳴が漏れた。それに反応して、星木さんが顔を上げる。

「良真義也」

「来んな！ 傷つけられたくなかったら、やめておこう。

不快な笑い声。痛む腕。羞恥で赤い顔。噛み締められた歯。私は絶望感に耐え切れず、泣きそうになる。

その時、倉庫の扉の向こうから、カラッ、という良い音がした。

## ミサイルキック

『カラーンツ』という、立てかけてあつた鉄パイプが一本だけ倒れたような音が、した。それは、自然現象によるものとは思えない、どこか人為的な、異様な音だった。

全員の視線が扉に向けられる。

「だ、誰だ！ そこにいる奴、出て来い！」

ドモリながら怒鳴る『なつちゃん』。どうやら相当に焦っているらしい。無理もない。

だつてそこに人がいたのなら、この状況を見られていたというわけで、それは彼女達にしてみれば、人の首にナイフを宛がいながら高笑いしていたのを見られていた、ということなのだから。

「出て来いつつてんだよ！！」

『なつちゃん』が再び怒鳴る。その瞬間、

私の右手を掴んでいた、彼女の握力が弱まるのを感じた。

彼女の意識は完全に扉に向いていたのだ。ここしかない、と私は思う。そして意を決し、

私は『なつちゃん』の手に思いつ切り噛み付いた。

「い、っ……？」

『なつちゃん』が苦痛に満ちた声を上げた。私も顔を動かしたために首をさりに切ったが、声は上げない。むしろ歯を食いしばるイメージで、彼女の手を噛むことに専念する。悲鳴と共に彼女の握力が弱まつていく。が、

「てめえ、何してんだ！！」

怒声を上げながら『しおりん』が即座にフォローにまわった。私の髪を引っ張り、『なつちゃん』の手から私の口を引きはがす。しかし、既に右手に拘束感はほとんど無い。いくら非力な私でも、これなら手を開くことはできる。

そして手を開けば、ナイフは落ちる。

「「……」「

髪を後ろに引っ張られていたため、彼女達の驚愕している表情が偶然にもよく見えた。『カシャンッ』と良い音立てて、ナイフが床に落ちる。直後、

星木さんと七さんによるミサイルキックが『なつちゃん』『しおりん』の顔面に炸裂した。

勢いよく後方に吹き飛ぶ美少女一人。しかしJICOは倉庫の端。つまり後ろはすぐに壁。そして彼女達は『ゴンシ』といつ無骨な一重奏を奏でて、埃まみれの床に沈んだ。

「…………お、終わった～」

危機を脱し、私はへなへなと汚い床に座り込む。と、

「大丈夫？ 凜さん」

七さんが私の左隣りにしゃがみ込みながら言った。

「うん。首をちょっと切っちゃったけど、何とか無事だよ。助けてくれてありがとう、七さん」

「どういたしまして」

私も七さんも、自然に笑みがこぼれた。そして、私はもう一人の命の恩人にもお礼を言うべく、後ろを向く。

「星木さんも、ありがとうございました ってあれ？」

見ると、星木さんが何故か後ろを向いて立っていた。  
どうしたのだろう？と思つた一秒後、私は思い出す。思い出しついでに、再び顔が熱くなる。そういえば、さつき

その時、倉庫の扉がガラガラ音を立てて、開いた。

黒縁眼鏡の先生がそこにはいた。

## ミサイルキック（後書き）

『ミサイルキック』については、プロレスのコーナートップからの『ドロップキック』ことです。

だから厳密には間違った表現なのですが（コーナーありませんし）、何かこう、斜め上からのキックを表現したかったのです（どんなだけ飛ぶんだよって感じですが）。

……嘘です。

『ドロップキック』より『ミサイルキック』の方が響きがかっこよかつたというだけの理由で使用しました。

申し訳ありません（謝）。

## 今度こそ終わり

月明かりをバックに、先生が立っていた。

「あ、先生」

「よ、良真義さん。それに入為さんに二組の星木君。な、何なんですかコレは」

かなり困ったような表情で、先生は倉庫内を見回す。美少女が色々なところでぶつ倒れてい、ナイフやスタンガンが転がっている、倉庫内を。

「……何なんですか、これ……」

……いや、何なんだと言われても。

私達は完全に被害者なのだからありのままを話せば良い。しかし『男の味方』や『偽ツンデレ』をどう説明すればいいのかがわからぬ。特に『偽ツンデレ』なんて七さんの内面にあまりに深く関わっているため、私が勝手に説明していい事柄とも思えない。どうしよう。

妙案が思い浮かばず、私はチラリと七さんを伺う。と、

七さんはレースの可愛い白い上品な感じのハンカチを顔に当て、すんすんと変な音を発しながら肩を震わせていた。

って、ハンカチ！？

「… ビリしたのですか、人為さん」

先生が気遣わしげな顔でこちらに駆け寄つてくる。人為さんはいつの間にか私と同じく、完全に床に座つていた。他人の庇護欲をそるようなポーリングだつた。

「……い、いえ。先生が、来ててくれて、安心してしまつて」「一体、何があつたのですか？」

そして七さんの創作ストーリーが始まる。

それはもう設定から違つていて、私と星木さんは付き合つているということになつていた。そのことに嫉妬した美少女達は私達をさらうという強行手段を取り、七さんは不運にも巻き込まれた美少女といつ役割だつた。

設定から既に容認できない話だつたが、私が訂正しようとしたら床に落ちていたナイフが何故か飛び跳ねるといつ不可解現象が起つり、黙らざるをえなかつた。

五分ほどで話は終盤に差し掛かり、結局運と偶然に助けられ狂乱する少女達を退けることに成功したといつことで終わつた。

「それから先は先生も見ていらつしゃつられたのでしょうか？」

「え、ええ。良真義さんが捕まつてしまつていたあれですね」

「……はい。親友の良真義さんを失つてしまつのではない、とても恐ろしく……」

言いながら身震いする七さん。何だかむしろ、素直に感心したくなるような演技力だつた。

「どうか先生。何で、もつと早く入つてきてくれなかつたんですか？」

これは星木さんが質問した。先生は頭をかきながら答える。

「それが、イマイチ状況が理解できず警察や学校に連絡すべきか迷いまして。その内に、立てかけてあつた鉄パイプを倒して、いよいよパニックになってしまい、出て行くのが遅れてしまったのです。申し訳ありません」

予想以上に予想は的中していた。

「あ、そうだ。警察と学校に連絡しないといけませんね」

そう言つて、先生は私達から少し距離を取り、電話をかけ始める。

今度こそ終わった。私は安堵の息を吐く。色々あつて緊張しつぱなしだつたが、それもようやく解ける。ついでに腕の痛みも戻つて来た。

「い、つだあ、！」

七さんと星木さんが驚いて顔をこっちに向ける。私も自分の腕を見遣る。そして、今更ながら右腕が真っ赤なことに気付いた。

「大丈夫、凜さん！？」

「い、つ、ぐ、だ、大丈夫……」

丸つきりやせ我慢だった。ものすごく痛い。ぶ、布拉ウーーめ……。筋違いの恨み言を心の中で漏らす。

その時、ある考えが電光のように頭に浮かんだ。

私は腕の痛みを再び忘れる。

「先生。先生も犯人ですか？」

## 今度は終わり（後書き）

はい、終わりません。

後書きにサブタイトルまで使つての終わる終わる詐欺でした。

いや、最初から詐欺るつもりだったわけではなく、本気で一、二話で終わらすつもりだったのですが……。

ダメでした。

仕方ないので、今度はちゃんと明記します。

あと、二話です。

「先生もこの娘達とグルなんでしょう?」

ちょうど電話をかけ終えた先生が、振り向く。

「……な、何を言つてゐるのですか? 犯人? グル? 一体何の

「

「やっぱりか」

先生の言葉を遮るように、星木さんが言つた。私は少しだけ驚く。

「……じゃあ、星木さんもあの事に気付いて……」

「いえ、何となく怪しいと思つていただけです!」

……ああ、勘か。イマイチ格好がつかない。せっかくの緊張感が台なしになつた。

「ち、ちよつと待つて。一人共何言つてんの? 犯人? 先生が?」

七さんが困惑した顔で私達に聞く。それに私は、逆に驚く。

「あれ? 七さんは気付いていなかつたのですか?」

「気付いてつて……。いや、だつて、凜さんは先生のおかげで助かつたと言つても過言じやないのよ? 偶然だつたけど。それを

「

七さんが喋つている途中だつたが、私は思わず咳く。

「……七さんって、意外と義理堅いのですね」

「なつ……！」

「いやー、ただあの先生が好みのタイプだつたつてだけだと思いますよ」

「ちよつ……！？」

「え、そんなんですか？ 七さんつて年上好き？」

「ええ、遊園地で言つてました」

「ほしつ……！！」

「そういうえば、何で一人は遊園地に行つたのですか？ 付き合つているフリなら、そこまでする必要ないと思いますけど」

「あれは最終確認みたいなもんですよ。学校では良い娘に見えても、遊園地みたいな特殊なシチュならボロを出すかと思つ」

「シャラップ……！」

七さんが大声で、しかも何故か英語で、私達の会話を中断させた。

「そんな話どうでもいいのよ！ デうしたら先生が彼女達とグルつてことになるのか、今はそれでしょ！」

床で氣絶している美少女達を指差し、七さんが大声でまくし立てる。わざとまでの上品さはどこへやら。つまり、あれも『偽』といふことじよ。

「七さん、落ち着いて、よく考えて下さい。まことにほどいですか？」

「し、知らないけど。……どこかの倉庫じゃない？」

「そうです。加えて言えば、大声出しても誰にも気付かれないとくらい人気のない場所にある、倉庫です」

言われてようやく気付いたようで、七さんは先生の方に顔を向けた。

「……先生、何で「こんなところにいるんですか？」

当然の疑問に、しかし先生は答えない。答えない先生に、私は更に問い合わせる。

「私の予想では、『』は学校から一キロ半くらい西に行つた倉庫街だと思いますが、違いますか？」

先生は、やはり答えない。

「じゃあ先生、今は何時ですか？」

「…………七時、二二十五分」

「まあ、そんなところでしょうね。改造スタンガンでも、一時間気絶させるのが精一杯でしょうから」

予想通りだ。

「先生、何故こんな所にいるのですか？　この時間では、親から電話が行つた可能性も低そうですがれど？」

すると、今度は返答があった。

「い、いやですね。早とちりですよ」

「早とちり？」

「そうです。私がここにいるのは、彼女達を付けたからですよ。良真義さんが教室を出たすぐ後に、廊下から悲鳴が聞こえたので、見ると、複数の少女に良真義さんが襲われていて、しかし、襲ってい

る少女達は武器を手にしており、その場で取り押されるのは辞めて、後を付けたのですよ。勿論、全て良真義さんの身の安全を」

先生は、早口で喋り続ける。

……私、悲鳴なんて上げたつて。スタンガンの襲撃にあつた前後は、記憶がかなり曖昧である。実は先生との会話の内容もテキトーだつたりする。

私が記憶を手繰ろうと頑張つてみると、先生が満足げな笑みを浮かべているのが見えた。ので、

「そうですか

私も笑つた。

「先生、さつきと言つてゐることが矛盾しますよ」

先生の笑顔が、凍りつく。

「先生、さつきは『状況が理解できず』とか言つてましたよね。しかし、私が連れ去られたのを見て、そこからずっと付けていたのなら一部始終見ていた筈です。それで、把握できなかつたのですか?」

先生は口をパクつかせる。

「ずっと見ていたのに、今頃連絡というのもおかしいです。私達が氣絶している間、先生は一体何をしていたの」

と、

「ふつ、ははハハハ！　御明察——う……」

先生が、眼鏡を外しながら、倉庫を揺らすほど、粗雑極まりない大声で、私の台詞を再び遮った。

「　「　「　—?」　「　」

先生の変貌ぶりに、私達は驚く。

「あーあ。騙し通せると思つてたのよ。せっぱ登場のタイミングミスったよな。運悪く鉄パイプ倒しちまつたのが原因だよな、絶対る先生ではなかつた。

私は気圧される。ギャップが恐ろしい。しかし、私は言葉を発する。ここで退いたら、場の主導権を持っていかれそうな気がした。

「な、何を言つてゐるのですか？　鉄パイプを倒したのは運が悪かつたからぢやなく、『しおりん』の言葉に動搖したからでしょう？」

「あ、あ、ん？」

ひつ……！

怖い。情けない声が漏れそうになる。でも、ダメ。頑張らないと。数的には、こちらの方が有利だ。恐れることは、ない。

「……や、やつさ『しおりん』は私の傷をいじりながら『ブラウニーの傷』と言いました」

私は痛む右肘をチラと見遣る。

「でも、彼女達は私達が遊園地から出て来たといひしからなかつた。つまり、私の怪我とブラウニーの関係は知らないはずなのです。ということは誰かに聞いたといふこと。そして」

私は息を吸うためにワンテンポ置く。

「そして、私が『ブラウニーにやられた』と言つたのは、先生、あなただけなのです」

## 推理編（後書き）

今回は推理編でした。

雑な推理でごめんなさい。

そして実はこの話、とっくにできていたのですけれど（2400文字だし）、大好きな作家先生の最新作を読んだり、ダラッダラしている間に、丸一ヶ月経ってしまいました。

すみませんでした！

とこつわけで、あと一話です。

## 黒い突起物のついたアレ

「私が最初に引っ掛けたりを覚えたのがこれです」

「そう、この右肘の痛みが、もはや先生とは呼べないこの男を疑うきっかけとなつた。」

「私は今日一日、ずっとゴードンとしてましたし、ブラウニー事件は……その、内容が内容でしたから、生徒の中では唯にしか喋っていません。その時も確かにブラウニーとは言わず、『例のクマさん』と言つていました。つまり、この傷とブラウニーが関係しているのを知つているのはあなただけで」

「ちょっと待てよ」

奴が四度遮る。

「ブラウニーの話は、あいつら女共が盗み聞いていた可能性もあるだろ」

奴が正論を吐く。しかし、そんなもの痛くも痒くもない。所詮はきつかけなのだ。それに、

「聞いて、いなかつたのですよね？」

「……ふんつ、まあな。どうやらあいつら、お前には全く興味がなかつたらしい」

「そう、彼女達にひとつでもやめさせねえよ」過ぎない。本当の田的是、星木さんだけ。

「車の中で話してやつたんだが、まさか言つちまつとは思わなかつたぜ」

「……車」

「ハツ、白々しいな、どうせわかつてたんだろ?」

「……まあ、はい。人目を引く美少女が八人も、しかも気絶した私達を抱えて、徒步で移動するのはほぼ不可能。だから、移動には車を使ったはず」

そして、車の運転には大人が必要。

これも奴を疑つた要因の一つだ。当たり前過ぎて推理でも何でもないが、当たり前過ぎて氣付かない、ということはある。加えて、さつきは窮地を脱した直後で気が緩んでいた。気付かなかつた可能性は高い。やはり、奴を疑えたのはブラウニーのおかげなのだ。

「ハツハツハツ！　よく分かつたと褒めてやるぜ。まさか良真義にばれるとはな。ばれるとしても人為か星木だと思つてたぜ」

「氣安く名前呼ぶな、死ね」

七さんが嫌悪感MAXで吐き捨てる。……ああ、思いつ切り騙されたことが原因か。そういうプライドは高そつだしなあ。

言われた奴は、しかし怒るでもなく、顔を下に向け、くつくつと笑つていた。

「……ついでだ、もう全部ネタばらししてやるぜ」

奴は、顔を上げるついでに、両腕も大仰に掲げる。そして、言った。

「俺は美形教師、ぶつ倒れてる女共は売女。俺達は共犯。さて、そこから導き出せる答えはなーんだ?」

「「ー!」

「まさか! あんたが売春を斡旋 「

「そして!」

奴はもう一度顔と腕を下げる。それはまるで、腕時計で時間を確認しているような。

「俺はさつさ誰に電話したでしょうか?」

「「「! ! ! 」」

「アツハツハ! 流石にガキだな。俺が時間を稼いでいることにも気付かないとは」

奴は高らかに笑う。……え、ちょっと待って、三対一で、数的には、こちらの、方が

「なあ、誰に電話したと思う? 答えは俺の売春斡旋の元締めの入れ墨付きの危ない人達でしたーアハハハハ!!」

危ない、人。それはつまり、ヤクザとかそういう。途端に私の身体は震えだす。

待つて、入れ墨? 数的有利が、ヤクザ? 床に落っこちているナイフ、凶器? 三人、たつたの?

殺され

「凜さん、しつかり」

十七さんに手を掴まれ、私は正気に戻る。前を向けば、星木さんが私達を庇うような位置に移動していた。

「…………あ」

変わらず冷静な一人を見て、私は体の震えがいくらかおさまる。が、

「先生、あんたが売春を斡旋していたのか」

今度は、背筋に悪寒が走った。それは、驚くほど冷たい声だった。誰が言ったのか理解するのに、数秒を要するほど、冷たい、冷たい、星木さんの声。

「あ？ もしかしてキレてんのか？ 僕が全部悪いんだー、みたい  
な？ アツハハハ！！ おいおーい、誤解だぜ」

明らかに雰囲気の変わった星木さんに対しても、奴はあくまで軽薄に応じた。

「確かに唆したのは俺だが、あいつらもノリノリで売春に励んでた  
ぜ？ 実りの良いバイトだ、つつってよ。ほらな、以外と俺は悪く  
ないんだよ。ハハ、悪いのはあいつらとあいつらの頭」

「黙れ、クソ野郎！！」

星木さんの怒号が倉庫に反響する。私からは彼の顔は見えないが、それでも彼の怒りはヒシヒシと伝わって来る。

「おいおい、そんな口きいて良いのか？ 何なりもつ一度連絡ひとつ、早く来させることもできるんだぜ？」

「その隙にふっ殺してやる」

物騒なセリフ。しかし、奴の笑みは崩れない。

「ハツ、残念でした。じつには『無線』何て言つもんもあるんだよ」

奴は懐から、真っ黒い物体を取り出し、

「あ、あー。あと何分で着きますかー？」

それに向かつて声を発する。と、

『「ひらり七翼会、もづー、一分で到着する』

ところ返事が返ってきた。間違いなく無線であった。そして、今のは『七翼会』というのが元締のヤクザ屋さんで、

「あと一、一分だってさー アハハハハハハー！」

一、一分で彼らはやって来る。

「アハハ、どうなんのかなー？ 全員美形だし、やっぱり奴隸市行きかなー！ 若い健康な内臓は高く売れるって聞くしなー！ 何に

嘲笑が、絶望感を増大させていく。しかし私は、再び震え出しそうになるのを必死で抑える。だつて、

「あんたをぶつ飛ばすのに、一分もいらねえよーー！」

言つて、星木さんは真つ直ぐ奴へ向かつて走り出す。

そうだ、七さんと星木さんは諦めていないのだ。一人が諦めていないならば、私も震えてなんかいられない。信じるのだ。一人を。七さんと、星木さんを！！

「ぐあつ、脚がああ！！」

と、星木さんが突然脚を押さえ呻き出した。私はつい、「…………は？」

と、鼻白む。

## 黒い突起物のついたアレ（後書き）

いつぞやのジャンル変えの話は、前回の『推理編』を見越してのものだったのですが、推理なんて呼べる代物ではなかつたので、辞めました。

それにしたつて、これ学園ものか？ という疑問はあるのですけれど、まあ、もう、終わりますし、大目にみて下せー。

あと一話です

「藍さん！ 大丈

「来るな、七！ ……あいつは、あいつだけは、俺がやうなきゃ  
いけないんだ……」

「アハハハハ！ どうした、既に満身創痍じゃねえか！…」

「…………」

七さんが何故か星木さんを名前で呼んだ。

星木さんは、どういうわけか脚を抱えながら、少年漫画にありが  
ちなセリフを口にした。

奴はその星木さんに向かつて『満身創痍』とか言つた。

「あんたなんか、私がぶつ殺してやるーー！」

七さんが声を荒げる。まるで、星木さんが使にものにならないか  
のような言い草。

「おじおこ、状況が見えてねえのかよ。もう、俺が一声発すれば、  
物騒な連中が乗り込んで来るんだぜ？ そんな口利いていいのか？」

「あんたなんか……！」

「…………七、お前はそこまで、良真義さんと一緒にいる。こいつは……  
俺、が……」

星木さんが、相当なスローペースで立ち上がる。『これだけでや  
つとできる』と叫わんばかりの拳動。すると、

「ハハッ、無理すんなよ。立ち上がるだけで精一杯じゃねえか！  
何なら二つから近付いてやろうか？ ほら、掛かつてこいよ

言いながら、奴は星木さんに近寄つていいく。

「…………

……何、この茶番。

え、何？ 何であいつこっちに来てるの？ 「満身創痍」って、確かに星木さんは（七さんの所為で）脚を切つたか何かしたみたいだけど、さつきは飛び蹴りしていたし、その前には女の子の顔面を蹴り飛ばしていたし、立ち上がるだけで精一杯とか有り得ないよ！？ というか、七さんは何でまたキャラ作ってるの！？ もうバレバレだよ！ 周知の事実と言つても過言じやないよ！！

と、思つたけれど、私はすぐに思い直す。

そういうえば、結局奴は一部始終を見てはいなかつたつけ。

そうだ、よくよく考えたら、奴は何も知らないはずなのだ。倉庫に入つて来てからヤクザを呼んだくらいなのだから、どう考へても奴は、私が『なつちゃん』に捕まるより前のことを知つているはずはない。つまり、奴が知つている情報は、星木さんが私をむにゃむにゃくらいなのだ。

七さんは奴に乱暴な言葉を使つたが、元々『ツンデレ』のフリをしていたため、恐らくバレていない。普段はツンツンして好きな相

手にだけ「テレる、とこうシソ」「テレキャラ」の許容範囲内の行動だらう。

何も知らない。

だからこそその一人の行動。星木さんは満身創痍を装い、七さんのアシストでよりリアリティを出す。今思えば、星木さんの怒号も、七さんの罵りも、全て奴を挑発するためだつたのだろうか。

恐ろしい。反面、頼もしい。

タネを知つてゐる側からみると、何とも滑稽な場面だつた。さつきまでのシリアル感はどこへやら。緊張なんて、とてもじゃないが、維持できない。ついでに、恐怖もどこかに吹き飛んでいた。

勝てる気しかしなかつた。

奴が徐々に速足になる。星木さんが口口口口と両腕を胸の前で構える。直後、奴が星木さんに殴り掛かり、

そして奴が曲を舞う。

遊園地で見た、あの技。奴は一声も発することなく、代わりに液状の何かを吐き出しながら私達のすぐ横を飛び過ぎていった。

ガツ、といつ、まるで頭蓋骨とコンクリートの床がぶつかつたような音がし、とうご、ドシャッ、といつ、この世のものとは思えないほど爽快感溢れる小気味良い心が洗われるよつな音が、響いた。

私は一応振り返る。が、確認するまでもなく奴は気絶していた。それなりに整っていた顔は、驚きと、（恐らく顔面から）床に落ちた衝撃で、歯が欠け、締まりのない、無惨な状態に変わっていた。心が、洗われ

「（人為ーー）」

私の思考を遮ったのは、星木さんの大声のヒソヒソ声だった。何ならもう全て終わつたような氣でいた私は、それにかなり驚く。

見ると、彼は右手を前に突き出していた。その手には真っ黒い何かが握られている。無線だた。奴が懷にしまつたあの無線を何故か持つている星木さん。考えられる可能性は、さっき奴を放り投げる一瞬で抜き取つた、というものだが、それではプロのスリ並のテクニツクだ。怖い怖い怖い。

それを見るやいなや、七さんは倒れている奴に駆け寄り、そして、

奴の顔面を踵で踏み付け出した。

「！？」

「（人為ーーーー）」

星木さんがもう一度大ヒソヒソ声を発動。どうやら星木さんが考えていた行動とは違つらじい。……いや、それはそうだろう。

星木さんの声で、七さんは踏み付けるのを辞める。そして、こつちを向き『てへつ』のポーズを取つた。何故か小慣れていた。思

いの外、可愛かつた。

と、七さんはしゃがみ込み、奴の身体をまさぐり出した。軽くR指定でも付きそうなその光景に、私は「何しているのですか！？」と、ツツ「コモうとした。が、ツツ「コミを入れる直前に、七さんが奴の懷から携帯電話を取り出したのを見て、ハツとする。

さらにその時、外で車の止まる音がした。私は振り返る。すつかり失念していたヤクザ屋さんことを、ようやくと思い出した。今更になつて焦りを覚えた。が、

「あ、あー、聞こえますかー」

あんづことが、星木さんは無線に向かつて喋り出した。「何しているのですか！！？」と言おうと思ったが、よく聞けばそれは普段の星木さんの声より低く、奴の声によく似ていた。

「助けて下さいー！」

突然、背後から切羽詰まつた少女の声が聞こえ、私はもう一度振り返る。七さんが携帯を耳に当っていた。

「あっ、すみません……。えっ、あっ、場所？ 場所は……一二〇〇の倉庫街で、何か、真つ黒くて怪しげな人がいっぱいいて

七さんは、ヤクザが集まつているのを目撃し、焦つて警察に電話している少女に成り切つていた。

## 嘘（後書き）

はい、とこりわけで、恒例の終わる終わる詐欺でした。

前回の後書きがあんな感じだったので、これは嘘をつかなればと思う、結果、こんな感じになりました。

さて、では、今度こそ本当に、フリとかではなく、あと一話です。

ラスト（前書き）

終わります

## ラスト

「その後、十分くらいで警察が駆け付け、ヤクザ屋さんは一網打尽になりましたとさ」

「……まじで？」

信じられない、といった表情の唯に私は「大まじです」と返し、大きく息を吐く。

あの事件から一週間。私の生活にも、ようやく静けさが戻ってきた。

あの日、警察が到着し、私達は被害者なんだか重要参考人なんだか、よくわからないけれど警察に連れていかれ、丸一日以上拘束され、解放されたのは水曜日の朝。しかし、心身共にクタクタだった私はその日も学校を休んだ。そして翌日学校に行くと、先生には呼び出され、同級生からは質問攻めに合い、しかも先週は土曜日にも授業があつたためそれは土曜日まで続き、本当に先週は散々だった。

週が明けると、さすがに大勢から詰め寄られることははなくなつた。が、代わりに唯が朝っぱらから根掘り葉掘り聞いてきて、私はため息混じりに質問に答え、現在時刻は七時五十分である。

「それでも、よくヤクザを十分も足止めできたね」

「全くよ。彼の口八丁には心底驚いたわ。何なら三十分くらいは留めておけそだつたもの」

「それと、十分で警察が来るのも早くない？」

「そもそもその通り。まあ、七さんの演技力が凄過ぎたってことなのでしょうよ」

「…………疲れてる？」

「あ、やつと気付いた？」

「いや、何か喋り方がぞんざい」

「それは申し訳ございませんでしたね」

私は何度も自分のため息つく。そして、この話をもう一度しただろうと思ふ、ちらしくたびれる。

「どうか、こいつ今田に限つて何朝七時登校とかしてんだよ。どんだけ聞いたかっただよ、というイライラの篭つた私の視線を受け、さすがに空氣を読んだ唯は、「や、やーて、予習でもしようかなー」と言い、窓際の自席に戻つていった。

鞄をゴソゴソ漁りながら「あれー？ 数学の教科書とノートと問題集がないぞー？」などと言つている唯を横田に、私はそつと安堵の息を吐く。

実は、唯には話していないことがある。無論、星木さんのことだ。倉庫でのこと、そして、一昨日の放課後のことでも。

土曜日。授業が終わり、質問攻めも一段落し、たまつた生徒会業務もやり終えた私が、疲れたきつた身体で校門へと歩いていくと、七さんと星木さんが校門で待ち構えていた。

「「」機嫌いかが？ 凜さん」

七さんはすいぶん上品な感じで挨拶してきた。学校では隣の席だが、結局今までろくに話もできなかつた。だからツツコまないで手

を振った。

「Jさんにちは良真義さん。俺と付き合ってくませんか」

星木さんと話すのもこれまた久しぶりだったので、私はツッコまないでシターンした。

と、二人が慌てて追いかけてきたので、私も全力で逃げた。が、捕まった。とりあえず、一旦体育館裏に移動することになり、そして

「Jめんなさい」

私は、頭を下げ、はつきりと断つた。

「…………ど、うして、ですかね？」

星木さんには似合わない歯切れの悪いその声に、私は胸が痛む。

星木さんには何度も助けられた。これまでのことと、少し変わつてはいるものの、悪い人ではないといつことも十一分に分かつた。でも

「ダメなんです。生理的に。髪を染める人を認めることが、私にはどうしても無理なんです！」

私は、顔を上げることができない。自分でも、こんな不実な断り方はないだろうと思つからだ。

私の返事を聞いてから、星木さんは一言も喋らない。傷つけて、しまつただろうか。

「……」「めんなさい。でも」

その時、不意を突くよつこ、星木さんが声を発した。

「あの、俺、髪染めてませんけど？」

「は？」

私はバツと顔を上げる。……え？ 今何て？

「母親の遺伝で、俺は生まれた時から金髪でしたよ？」

「え？」

ちょっと待て。仮にそれが本当だとした場合、星木さんは、成績が学年トップで、サッカー部のエースで、背が高くて、友達思いで、純正の金髪イケメいやいや待て待て待てちょっと待て、例えば仮にもし万が一そうだとした場合、えっと、いや、だって、そんな鮮やかな金髪が。

私が星木さんの金髪をまじまじ見つめていると、私の後ろにいた七さんが口を挟んだ。

「ちなみに、私は髪染めてるけど」

「はあああああーーー？」

「え、ダメなの？ ジヤあ私達のお友達とこのせき合せ終わり？」

？」

「そ、それは……」

「付き合つて下せこー。」

「え、ちよつ」

「凜わんー。」

「良真義ひこー。」

「……ひー。」

な、何コレ… ビウしたからここなの？ 何を何からビウすれば  
そして私は、頭痛もん感じじる頭で、一つの答えを導き出した。

「……す」

「『』『』『』？」

「すみませんー。今日せき合せよつなりーーー。」

「ええーーー。」

「うよつ、凜わんーーー。」

思い出すだけで頭が痛い。星木をさじるか、やれども、ビウ接すればいいのか。  
と、

「おおう！？ な、ちょっと凜、あれ何だ！？」

突然、唯が変な声を上げ、私を呼んだ。見れば、唯は窓ガラスに張り付いていた。私は深くため息をつく。今は馬鹿に構っている場合じゃないのに。しかし、唯が急かすので、私は渋々窓に近寄り、

星木さんと七さんが真っ黒い髪を携えて登校して来るのを見た。

私は思い切り頭を窓にぶつける。『コンツ、』といつ良い音が鳴る。一人はそれに気付き、

「あ、凜さんお早う」

「良真義さん、お早うございます」

普段通りの二人に、私はなんだか悩んでいるのが馬鹿らしくなった。堪えきれず、笑みがこぼれる。私は窓を勢いよく空けた。心地好い風が吹いていた。私は叫ぶ。

「藍さん、髪を染めるのは校則違反ですよーー！」

## ラスト（後書き）

先生は捕まり、美少女達は退学処分になりましたとさ、めでたしめでたし。

本ッ当にめでたい！

終わりました！

まさか終わるとは思つていませんでしたが、終わりましたよーーー！

長かつたです。

前作とは人称を変えたり、話ラブコメティストにしようと思つたけど失敗したり。

今回は漫画のボツネタではないため、細部が前作以上にテキトーで、伏線を張り忘れまくりました。

仕方ないから後付けの無理矢理なつじつま合わせを乱発したりして誤魔化し誤魔化し。

本当は、唯をもつと絡めるつもりだったし、七のお父さんは警部だつたし、推理編ももつとビシッと決めるはずだったのですが……いや、もう何も言いません。

私には才能が無かつた、それだけの話です。

と、いうわけで、私、『小説家になろう』を退会致します。  
これは、嘘ではありません。

これまでお付き合いくださいました方々には大変申し訳ございませんが、最近は更新スピードもどんどん遅くなっていましたし、正直、限界を感じていました。

ですので、執筆のまね事からは、もうスッパリ身を退くことに決めました。

退会すると全部消えてしまうのです、たゞがに明日とかではあります  
ませんが、十日後には去るつもりです。  
今月の一十三日ですかね。

最後に、このよひな拙作をお読みくださいました旨様にお礼申し上  
げます。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7947u/>

---

虚虚

2011年11月17日19時52分発行